

神戸市看護大学
地域連携教育・研究センター

2019 年度
実績報告書

刊行に際して

神戸市看護大学は 2019 年 4 月 1 日より公立大学法人神戸市看護大学として再出発いたしました。法人化にあたって本学は 23 年間の経験をもとに、「保健医療に関する質の高い教育研究活動に取り組み、その成果を絶えず地域社会に還元すること及び豊かな教養と看護の専門性を備えた実践力のある看護人材を育成することを通じて、学術の発展と市民の保健、医療、および福祉の向上に寄与することを目的とする」と定めています。神戸市にある看護学の大学として、教育を通じた実践力のある人材の輩出、研究を通して学術の発展に寄与するという本来の大学の使命の上にさらなる市民の健康と福祉の向上に向けてこれまで以上に学生および院生、そして教職員が力を合わせて、地域連携活動を進めるべく様々な事業に取り組んでまいりました。

この報告書は、2019 年度 1 年間の本学の地域連携教育・研究センターを中心として本学の教職員が取り組んできた活動を網羅しています。阪神淡路大震災以来、地域の皆様と連携して培ってきた活動が継続して行われてきました。教育活動では、教育ボランティアの皆様のご協力を得て、全国でも他に例を見ないほどの規模で、実のある教育ができていると思います。関係者の皆様のご尽力が有難く、また誇らしく思います。この報告書をお読みいただきまして、様々な角度からのご意見やコメントをお寄せいただきますと幸いです。

この報告書を纏めている段階で、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行しはじめています。これからどのような広がりを見せるのか、ワクチンも治療薬も開発されていないこの感染症が人々の生活にどのような影響を及ぼすのか、そのとき本学は教育研究機関としてどのような対応を求められるのか不気味な状態ですが、地域連携活動として市民の皆様の健康を守るために、本学の教職員はどのような活動ができるのか試されるときが来るのではと思います。社会は大規模災害の度に苦悩しながらも新たな文化を育ててきました。本学は市民の皆様と共にこれからも歩んでまいります。

公立大学法人 神戸市看護大学
学長 南 裕子

目次

地域連携教育・研究センターの概要	5
------------------	---

I. 地域貢献活動

地域貢献活動の概要	8
活動実績	9
まちの保健室	9
コラボカフェ	23
プレパパ・プレママセミナー	32
竹の台ふれあいまつり	33
命の出前講座	35
西区ヘルスアップ作戦	36
トライやる・ウィーク	36
こうべ生涯学習カレッジ（コムスタ神戸）	38
ユニティ講座	39
看護専門職講座	40
出前健康講座	41
HAT 神戸復興住宅における出前講座	42
COC+事業の成果	43

II. 教育・研究活動

教育・研究活動の概要	45
活動実績	45
教育ボランティア導入授業	45
教育ボランティアを導入した健康生活支援学実習	47
教育ボランティアニュースレター	46
教育ボランティア交流会	48
教育ボランティア座談会	48
学生ボランティアの活動状況とその支援	49

III. 国際交流活動

国際交流活動の概要	59
活動実績	59
英語ネイティブ教員の着任と English Lunch time	59
留学生の受け入れに関する近隣2大学への聞き取り調査	59
米国ワシントン大学での在外研究	59

A decorative graphic featuring two concentric blue circles, one smaller and positioned higher than the other. Two thin blue lines originate from the top corners of the page and converge towards the circles, framing them. The circles are composed of three concentric layers of blue, with the innermost being the darkest and the outermost being the lightest.

地域連携教育・研究センターの概要

地域連携教育・研究センター設立の経緯と趣旨

神戸市看護大学は、文部科学省の現代 GP「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」の助成（2006 年度～2008 年度）事業の実施に伴い、2009(平成 21)年度、地域社会における健康支援の推進と、教育・研究における地域との交流を発展させることを目的として、「神戸市看護大学健康支援地域連携センター：通称コラボセンター」を開設した。

2007(平成 19)年 12 月には、神戸市看護大学と西区役所が相互に協力し、地域の発展と人材育成に寄与するため、連携協力に関する協定を締結し、地域住民との協働作業で「健康づくりと創造的な学生教育」を共に発展させる取り組みを行った。さらに、2012(平成 24)年度には、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携活動、国際交流活動、教育・研究活動の 3 つと広報活動を、教職員が力を合わせて全学的に展開した。

2013(平成 25)年度には、これまでの取り組みを基盤に、文部科学省地（知）の拠点整備事業（Center of Community：以下 COC 事業）「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」に採択され、事業実施区域の須磨区とも上記同様の連携協定を締結した。これを契機に上記センターを改組し、地域連携教育・研究センター（以下教育研究センター）を開設し、継続部会、COC 部会の 2 つの部会で構成し、従来の西区での地域貢献への取り組みは継続部会で、また、COC 部会は、新たに神戸市の課題となっている高齢化率の高い須磨区北須磨地域へ拡大・発展させる形で事業を展開した。

2017 年度、文部科学省からの COC 事業への助成終了を機に、北須磨地域での教育・研究、地域貢献活動をまちの保健室、コラボ教育などの一部を残し縮小するとともに、2018 年度は、COC 部会を廃止し、地域連携教育研究センターとして西区を中心に、地域住民との交流、健康増進活動等を継続的に行っている。

2019 年度の地域連携センターでは、2018 年度の活動を継続・実施するとともに、現状の取り組みでの課題を見出し、今後の活動を充実させる目的で過去 5 年間の地域貢献活動を総括した。以下に、教育研究センターが取り組んできた様々な事業のまとめとその課題、今後の展望を示す。

地域連携教育・研究センターの活動における課題と今後の展望

地域連携センターの活動は、2006(平成 18)年度から西区で地域住民と協働作業で行ってきたまちの保健室、命の感動体験、プレパパ・プレママセミナー、看護専門職講座、ユニティ公開講座、国際フォーラムなどの地域活動を継続して実施している。また、コラボカフェは大学の施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」の一つであり、今年度で 8 年目となった。

これらの活動については、西区住民への実施後のアンケート調査等によると、地域住民の事業への満足度についてはある程度高い評価は得られてはいるが、本学の事業で得られた知識を日常生活にどの程度活かされている等については調査しておらず、また経年的に地域住民の健康データの蓄積がない為、実施した内容の客観的評価には至っていない。今後は、まちの保健室活動を通じて経年的に健康データを蓄積する必要があり、それにより住民の健康ニーズに基づく知識の提供が可能となる。このような過程を経ることにより、西区住民のセルフケアの技術が向上し、大学と地域住民との信頼はより深まると考える。

また、大学の地域貢献は、教育プログラムや研究のプロセスを通じて行えることが他の事業体が行っている地域貢献活動と差別化できる点である。しかし、まちの保健室やコラボカフェなどの実施主体は教員であり、学生の参加は、学生ボランティアによる協力が主であり、少ない。今後は、看護学のコアカリキュラムの中にまちの保健室事業を中心に組み込み、学生たちが地域住民の生活や健康を理解し、活用できる授業科目の割合を増やしていく必要がある。

教育ボランティア導入授業については、2019年度は14科目の授業において教育ボランティアの協力を得られた。本年度で当該事業は10周年を迎え、教育ボランティアの代表者と教員との座談会を開催した。座談会での教育ボランティアからのコメントは、学生たちの反応やボランティアが関わることによる学生たちの変化を知りたい等の意見が出された。今後は、教育ボランティアの関りが、どの程度学生の学修、その後の実習等で生かされているのか、質的、量的な評価が必要であり、またその成果を教育ボランティアにフィードバックし、さらに、授業のプログラムに活用することが求められている。

A decorative graphic consisting of two blue circles of different sizes, each with a darker blue center and a lighter blue outer ring. Two thin blue lines intersect at a point between the circles, forming a V-shape. The lines extend towards the top corners of the page.

I. 地域貢献活動

地域貢献活動の概要

本学では地域貢献として、兵庫県看護協会が協賛し開設する「まちの保健室」、子育てひろば事業の拠点である「コラボカフェ」、本学助産学生が中心に実施する「プレパパ・プレママ教室」「竹の台ふれあいまつり」、ウィメンズヘルス看護学分野の教員が実施する「命の出前講座」、地域のヘルスアップ推進員と連携して健康づくり活動を推進する「ヘルスアップ作戦」、地域で学ぶ中学生の体験活動「トライやる・ウィーク」、神戸市の「大学連携セミナー神戸生涯学習カレッジ」への協力、看護職を対象とした「看護専門職公開講座」の実施、ユニティ公開講座への講師派遣や地域緑卓会議への参加、さらに、本年度は、ユニティ 20 周年記念式典において本学の地域貢献活動の概要を報告した。いずれの事業においても、本学教員と学生が行政機関や他機関、また地域の方々と連携・協働し、さまざまなライフステージにある地域の人々の健康の保持増進を目的として活動している。また、地域からの要望に対応して「HAT 神戸復興住宅における健康講座」や「出前健康講座」も合わせて実施している。地域貢献活動として実施している事業の一覧と担当者は表 I-1 に示すとおりである。

地域貢献活動一覧と事業担当者

事業内容		担当者
まちの保健室	健康支援	池田、小山、畑中、江川、野寄、平野、高田、片倉、丸尾、宇多、大瓦、岩本、波田、山下、藤本、石原、新澤、稲垣、児玉、大澤
	子育て支援	二宮、岡永、山本、清水
	こころと身体の看護相談	船越、山岡、石田、坂口
	もの忘れ看護相談	坪井、服鳥、秋定
まちの保健室運営会メンバー 波田、服鳥、池田、岡永、丸尾、石田、野寄、新澤、藤木		
コラボカフェ (コラボカフェ運営会メンバー)		岡永、石原、波田、沼田、石田、大瓦、丸尾、丹野、藤本、保育士
プレパパ・プレママセミナー		高田、嶋澤、井上、沼田、細川、比名、矢野
竹の台ふれあいまつり		高田、嶋澤、井上、沼田、細川、比名、矢野
命の出前講座		井上
西区ヘルスアップ作戦		波田
トライやる・ウィーク		丹野
神戸生涯学習カレッジ(コムスタ神戸)		岡永
ユニティ講座		二木、檜田、谷、丹野、加藤
看護専門職講座		石田、石原、大瓦
出前健康講座		丸尾
HAT 神戸復興住宅における健康講座		池田、桑原
事務局		金田、辻井

活動実績

①まちの保健室

神戸市看護大学「まちの保健室」（以下、本学「まちの保健室」）は、2005年12月から、地域住民を対象者として、出産・子育て、生活習慣病やこころの健康、介護等、健康に関する様々な健康上の課題に、看護教員が相談に応じることで、地域住民の健康維持・増進を目指すことを目的に活動している。現在、子育ての保護者とその子どもを対象として、健康相談や子どもの発育測定、参加者間の交流促進を支援する「子育て支援」、地域住民一般の方々を対象にした「健康支援」、こころの悩みを抱えている方を対象に看護相談を行う「こころと身体の看護相談」、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとへの支援を行う「もの忘れ看護相談」の4拠点が活動している。

①-1 まちの保健室「健康支援」

○概要

2019年度には、表1に示すよう5回の活動を行った。スタッフ数は、プログラム内容により必要人数を配置し、学生と住民ボランティアの協力を得ながら、「糖尿病入門」、「身近な人ががんになったとき備えておきたいこと」、「訪問看護 Part4. 認知症予防」、「やってみよう!!AED」、「生活体力を測ってみませんか?」と各回ともに特徴のある活動を実施した。

参加者は、延べ165人(33人/回)であった。過去4年間の参加者数は、2018年262名(52.4名/回)、2017年241名(48名/回)、2016年205名(41名/回)、2015年257名(43名/回)であり、今年度は過去5年で最も少ない人数であった。

表1 今年度のテーマ

回	日程	テーマ	参加人数			スタッフ数			
			計	内訳		計	内訳		
				男	女		教職員	学生	住民ボランティア
1	5月9日	糖尿病入門	22	10	12	8	6	2	0
2	5月25日	身近な人ががんになったとき備えておきたいこと	18	9	9	4	4	0	0
3	9月5日	訪問看護 Part4. 認知症予防	19	8	11	6	6	0	0
4	9月11日	やってみよう!!AED	9	4	5	6	6	0	0
5	11月15日	生活体力を測ってみませんか？	97	30	67	33	12	12	21
合計			165	61	104	57	34	14	21

○参加者の概要

参加者の性別、年代、居住地は、各回のアンケートデータから集計した。

参加者の性別は、全体として女性が多いが、テーマにより男女の比率は異なっている。年代内訳では、60歳代が最も多く、次いで70歳代が多い（表2）。

表2 参加者の年代(n=164)

回	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代
1	1	1	1	7	10	2
2	0	0	0	11	6	0
3	0	0	0	3	13	3
4	2	0	2	0	5	0
5	0	0	0	97	0	0
計	3	1	3	118	34	5

参加回数は、初回参加が最も多く、次いで2回目が多いが、4回以上参加されている方も多く、本活動が地域に根付き、地域住民への継続した健康支援を担っていることが伺える（表3）。

表3 参加回数(n=145)

回	初めて	2回目	3回目	4回以上	不明
1	11	4	3	4	0
2	5	4	1	7	0
4	7	0	0	2	0
5	44	29	14	10	0
計	67	37	18	23	0

居住地域は、大学に近い学園都市エリアからの参加者が多くを占めるが、区外の方の参加も多数みられた。これらより、自宅近隣の開催が参加を促しているだけでなく、各回テーマが健康への関心に合致していたためと考えられた（表4）。

表4 居住地(n=164)

回	学園西町	学園東町	伊川谷地域	井吹台地域	西区内 (左記以外)	市内 (左記以外)	その他
1	3	7	0	0	8	3	1
2	0	12	0	0	0	5	0
3	3	3	0	0	5	5	3
4	4	1	1	0	0	3	0
5	16	34	0	4	25	18	0
計	26	57	1	4	38	34	4

○各回の活動内容

「1.糖尿病入門」

日程：2019年5月9日（木） 14：00 ～ 16：00

場所：神戸市看護大学 西館 12号教室

参加人数：22名

住民からニーズが高い「糖尿病」をテーマにとりあげ、今回は治療の基本となる食事と運動に焦点をあてた。冒頭の20分は、院生が糖尿病の成因・合併症の症状・血糖とは何か・治療の原則・食事療法と運動療法の意義について説明した。その後、別の院生が「今日からできる食事療法の工夫」について紹介した。講義ではメモをとりながら、熱心に話を聞いている様子が見られた。次に、「1口残す」ことを実感してもらうため、参加者に20グラムの米飯を手にとってもらい、日頃食べている一口の量との比較や20グラムという重さについて実感してもらった。

後半は運動療法の意義を説明し、今回は「ストレッチ」と「ながら体操」を紹介した。ストレッチは、息をとめない・15～20秒などのポイントを紹介し、実際に行ってもらった。次に、神戸市が作成している介護予防ハンドブックをもとに、365歩のマーチの音楽にのって、かかとあげ・つま先あげ・ひざ伸ばし・もも上げ・足の後ろ上げを行った。参加者は、これら「ストレッチ」と「ながら体操」に最初から最後まで真剣に取り組む様子がみられた。太ももの前面の伸展ストレッチでは、バランスを崩しそうになる人もいたため、早めに次のストレッチに切り替えた。「ながら体操」は全ての運動を最後まで通して安全に行うことができた。高齢の対象にとっては十分な運動になったと考える。

アンケート結果では、近隣と西区からの参加者が7割程度で、西区以外も14%であった。また企画全体の満足度では、「とても満足」と「まあ満足」が95%、今後生活のなかに取り入れられるものはありましたかの問いには「はい」が76%であった。自由記載には、「説明に具体性がある・ながら体操で筋力の低下を認識した・わかりやすくてとても良かった・体操までできてよかった・糖尿病にならないよう気をつけたい」などの意見がみられた。以上のことから、今回の企画は糖尿病予防や食事や運動の生活習慣を見直す機会になったと評価している。

「2.身近な人ががんになったとき備えておきたいこと」

日時：5月25日（土） 14：00～15：00

場所：神戸市看護大学 西館 22号教室

参加者：18名

誰もが参加しやすいようにするため、大学祭と同時開催とした。講師は本学のがん看護学の教員が担当し、リーフレットを用いながら、神戸市のがん対策や社会資

源などの紹介を行った。開催後、4 名の方から個別の相談があり対応した。相談内容は、がん患者の家族としての辛さやご自身の健康診断の方法に関すること、緩和ケアを受けるタイミングについて等であった。アンケートでは、参加理由に「将来がん看護専門看護師になりたいから」という記載もあった。

これらの結果より、「がんになったときの備え」といった健康教育の役割に加え、「個別の相談」による現状での悩み対応や、「がん看護専門看護師」の認知を地域住民の方に広める機会にもなったと評価した。

「3.訪問看護 Part4. 認知症予防」

日程：2019 年 9 月 5 日（木）13：30～15：00

場所：神戸市看護大学 講義室

参加者数：19 名

今回で 4 回目となる『もっと知りたい!! 訪問看護 part4』を実施した。サブタイトルを「認知症予防」とし、「認知症とは?」「生活の中でできる認知症予防」「認知症になっても大丈夫! 訪問看護ができること」を内容として、講義やミニアクティビティを入れながら参加者と一緒に活動した。また、その後の質疑応答や意見交換では、参加者から「歯周病が認知症に関与するという研究結果の根拠は?」「訪問看護を利用する際の保険の違いや選択は?」といった具体的な質問もあり、全体で内容を深めることができた。最後には、2 名の参加者から個別に相談があり、訪問看護や認知症の方への具体的な対応について話があった。

実施後のアンケートでは（回収率 100%）、「とてもよかった」12 名（63.2%）、よかった 7 名（36.8%）と高い評価を得ることができた。自由記載では「生活にいかせる内容があり大変よかった」「活動を交えての進め方がよかった」などの意見があり、参加型のミニアクティビティを取り入れたことも参加者の満足度につながったと考えられた。今後の企画に期待する内容として、老々介護の支援や認知症の方への対応の仕方といった希望もあげられたことから、次年度以降の活動に活かしていきたいと考えている。

「4.やってみよう!!AED」

日程：2019 年 9 月 11 日（水）14:00～16:00

場所：神戸市看護大学 成老実習室

参加者数：9 名

本事業は AED（自動体外式除細動器）をテーマに取り上げ、心肺蘇生法や AED の使い方についての講座を設けた。参加者にむけて心肺蘇生法や AED の使用方法などについて講義と実際の心肺蘇生法についての DVD 鑑賞を行った後、心肺蘇生法および AED の使用方法について人形を用いて 1 時間程度の演習を行った。参加者は

実際に心肺蘇生法を経験することで、講義で説明された内容を具体的な手順として身に着けることができた。さらに手順を行う上で不明な場合には、随時質問する機会を設けていたことで参加者の理解につながっている様子が伺えた。本事業は 30 名の定員に対して 9 名の参加と少人数での開催であった。予定よりも少ない参加人数であったが、参加者の半数以上が「AED の使用方法を知りたい」「緊急時の対応を知りたい」と目的意識を持って参加していた。そのため目的に応じて詳細な説明することを心掛け対応することで参加者のニーズに応えることができた。また、少人数で行えたことで参加者一人一人の手順を丁寧に確認することができた。

本事業に対する参加者のアンケート調査では、参加者の 100%が本事業への内容に「大変満足している」「満足している」との回答していた。その満足度の理由としては「使用する機会があれば自信ができる」「とにかく経験させて頂き良かった」という回答であった。これらは、本事業で演習を取り入れたことで参加者の体験につながり自信を得ることが出来た結果であると評価する。また、参加者の 2 割程度が 20 歳代から 30 歳代であり、極少人数ではあるが若年層の需要もあったと言える。「自分の子供への急変時の対応を知りたかった」「客室乗務員になるために事前に学んでおきたかった」という自分にあった目的で参加していたことが、今回の需要につながっていたと推察する。

しかしながら、本事業は前年度の事業内容と比較すると参加率は、かなり低下しており、定員制にしていたことも影響していると考えられる。今後は、参加者のニーズに合わせた事業内容の検討および開催時期の見直しも必要である。

『5.生活体力を測ってみませんか？』

日程：2019 年 11 月 15 日（金）13:30～16:00

場所：神戸市看護大学 体育館

参加者数：97 名

本事業では、参加者に身体計測や体力測定を行い、測定結果をもとに各参加者への健康づくりについてアドバイスを行った。参加者は血圧測定と問診を受けた後、ストレッチを行い、身長、体重、体組成、握力、足指力、長坐位、骨健康、開眼片足立ちや 5 M 歩行の測定を受けた。測定後は各測定項目の指標に基づき、食生活や睡眠、運動に関することなどについてパンフレットを用いながら、参加者が日頃気になっている健康のことなども含め相談いただいた。

97%の参加者が、事後のアンケート項目にある「自身の健康を見直したり増進するようなテーマであるか？」という問いに「そう思う、まあそう思う」と回答した。自由記述では「良い機会を頂き、とても健康に気を付けなくてはいけない事を理解することができました。」などの感想をいただき、本事業は、参加者自身の生活や加齢とともに変化する体力の現状を知る良い機会になっており、生活改善・維持への

取り組みをはじめのきっかけになっていると考えられた。また、リピーターの参加者から、毎年測定を継続することが健康を維持する励みになっているとの声も聞かれた。参加者の約 96%が本事業の内容に「とても満足」「まあ満足」と回答している事や、参加者の約半数はリピーターである事から、本事業は参加者におおむね満足していただいたと評価している。

本事業は本学保健師課程 4 年生授業である「公衆衛生看護活動論Ⅱ」の授業としても実施されたため、ボランティア登録看護職の他に、本学の教育にボランティアとしてご協力いただいている地域住民 21 名と本学 4 年生 12 名とともに運営した。血圧測定と問診、相談は看護職と学生が交替で担当し、身体計測と体力測定を学生と教育ボランティアで担当した。運営についての振り返りとして、参加者の中には、学生ではなく看護職に相談したいと希望される方もいらっしゃったことから、学生が相談を請負う場合でも参加者が安心して相談できるような配慮が必要であった。その他、測定項目によっては、参加者の待ち時間が長くなってしまう場合があり、次年度は参加者のよりスムーズな動線や待ち時間を少しでも短くできるような工夫を会場レイアウトに反映し、改善する必要がある。

○評価と今後の課題

各回ともに参加者の満足度は高く、今年度のテーマも近年の健康トピックスを捉えたテーマであったと評価できる。今年度は過去 5 年で最も少ない参加者数であったが、参加者からは質問が多く、日常的に気になる点の相談が十分にできたといった少人数のメリットを活かした活動ができた。今後も、看護大学が実施する「まちの保健室」として、テーマや会場設定等を工夫し健康支援を発展させていく。

①-2 子育て支援

○概要

地域における育児支援の場を提供する取り組みとして、2006 年から実施している。子どもに関する相談を行うとともに、参加した親子同士の交流が図れる機会を提供することを目的として年 6 回行っている。

○活動日時（下記日程にて 13 時半～15 時半で実施）

2019 年：5 月 16 日(木)、7 月 3 日(水)、9 月 12 日(水)、11 月 13 日(水)

2020 年：2 月 6 日(木)、3 月 18 日(水)

○運営

本学内に開設されているコラボカフェ内で、「まちの保健室」の登録ボランティアである小児看護学分野の教員 4 名が参加者の個々のニーズに合わせて相談を行った。コラボカフェが開催されている木曜日にはコラボカフェで勤務する保育士に、またコラボカフェが休みである水曜日には地域ボランティアの方に協力を求め、必要に

応じて子どもと関わってもらうことで、親が安心して相談に集中できる環境を整えた（表1）。

表1 各回の運営人数

* 7/3 の教員のうち 1 名は、相談待機

		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	合計
		5月16日	7月3日	9月12日	11月13日	2月6日	3月18日	(延べ人数)
参加組数	初参加 組数)	7	4	7	1	1		20
	リピーター	3	0	1	3	3		10
	不明	0	0	0	0	0		0
	合計	10	4	8	4	4		30
参加者数	親・祖父母	12	4	8	4	5		33
	乳幼児	10	5	8	4	5		32
	合計	22	9	16	8	10		65
測定延べ件数	身長	10	3	5	1	0		19
	体重	10	3	6	1	0		20
	合計	20	6	11	2	0		39

* 11/13 は、事務職員が交代で子どもの見守り（地域ボランティアが不在）

* 3/18 は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止（兵庫県看護協会からの通達あり）

○参加状況

今年度の参加者組数は図1のとおりである。計30組（養育者（両親・祖母）33人、子ども32人：計65人）の参加があり、昨年度より減少していた。

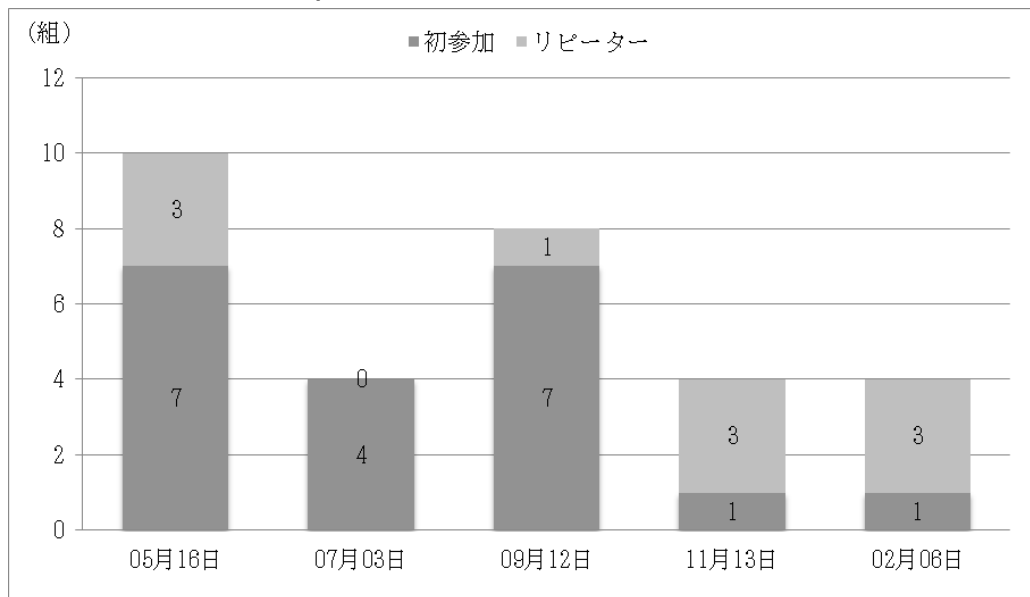


図1 各回の参加組数

各回の相談者の子どもの年齢の内訳は、1歳未満の乳児が18名（58%）であった(表2)。

表 2 各回の相談者の子どもの年齢

年齢	5月16日	7月3日	9月12日	11月13日	2月6日	3月18日	合計
6か月未満	2	1	0	0	0		3
6か月～1歳未満	3	2	6	3	1		15
1歳～2歳未満	5	0	2	0	1		8
2歳～3歳未満	0	1	0	1	1		3
3歳以上	0	1	0	0	1		2
不明	0	0	0	0	0		0
合計	10	5	8	4	4		31

参加のきっかけは、「コラボカフェ開催日にたまたま『まちの保健室』が開催されていたから」「コラボカフェでもらったチラシを見て」「過去に『まちの保健室』に参加した時の案内を見て」という人が多かった。また「その他」として、神戸市が配信している「子育て支援メール」や保健所等関連機関、民生児童委員の紹介で情報を得ていた（表 3）。

表 3 各回の参加のきっかけ

項目	5月16日	7月3日	9月12日	11月13日	2月6日	3月18日	合計
コラボカフェに来て(たまたま)	4	1		0	0		5
コラボカフェでチラシをもらって	2	0	2	0	0		4
過去利用時の開催案内を見て	0	0	0	2	3		5
回覧板、掲示板、チラシ	3	3	4	2	3		15
知人の誘い・紹介	1	0	1	0	0		2
大学HPやインターネットを見て	0	0	0	0	0		0
その他	0	0	0	民生委員の紹介	0		0
合計	10	4	7	4	6		31

○相談内容(図 2)

相談内容は日々の子育ての中で生じるさまざまな不安や疑問であり、成長発達や栄養に関することが多く、次に排泄や子どもとの関わり方、生活リズムに関する相談が続いた。その他の相談の内容は、歯の衛生、けがの手当て、内服の方法、子どもの癖について等、多岐に渡っていた。

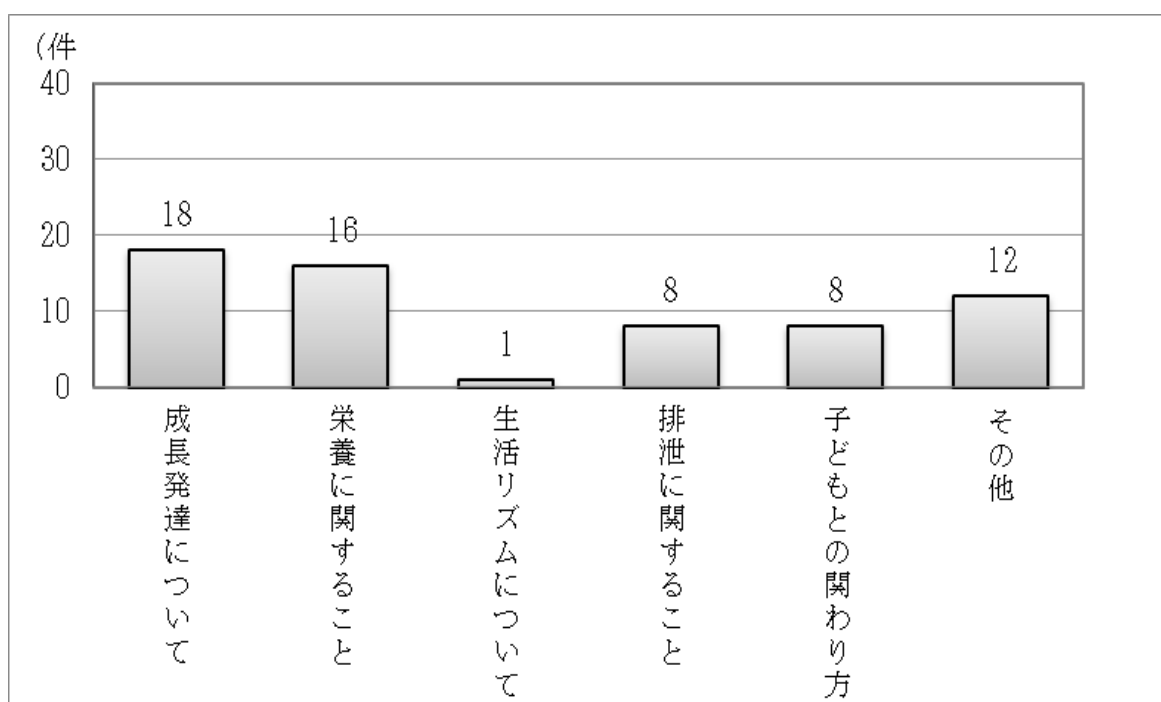


図2 相談内容と年間延べ件数

○相談後のアンケート内容より

「まちの保健室（子育て支援）」の評価を行うために、昨年度から相談後に簡単なアンケートを実施している。質問項目は下記の①から④までの項目であったが、相談者のほとんどが「そう思う」「まあそう思う」と回答し、「思わない」「あまり思わない」と回答した相談者はいなかった（図3）。

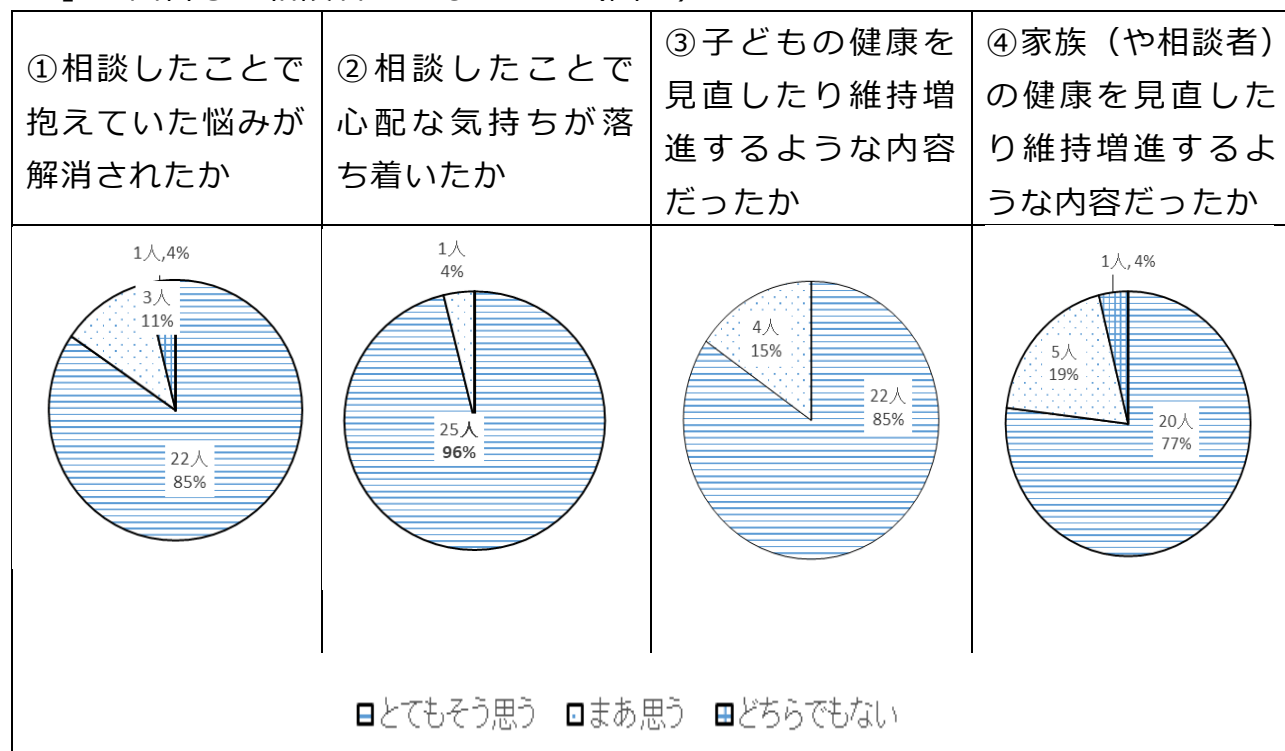


図3 相談後のアンケート内容

自由記載では「気軽に相談できてよかった」「日頃感じている小さな不安や迷いをたくさん聞いてもらい、私自身も安心できた」「聞きたいことが聞けてモヤモヤしていた気持ちがスッキリした」「自分では気づかなかったアドバイスをもらえてよかった」「前回相談させてもらった内容をよく覚えてくださっていて、それだけで気持ちが落ち着いた。」「(相談中に) 子どもを見てくれる人がいて安心した」「気軽に相談に来れるので今後も利用したい。」などの記載がみられた。

○教育上の効果

今年度も昨年度同様、小児看護学の大学院生の授業でまちの保健室を活用した。また教員にとって、住民の方の子育て相談に応じる機会を定期的にもつことは、子育てに関する地域住民の悩みを直接感じる機会になり、相談スキルの維持にも繋がっていると考ええる。

○まとめ

コラボカフェ開催日にはコラボカフェの保育士の目も行き届いていることから、親は安心してじっくりと相談をすることが出来たのではないかと考える。

参加者数は月によって様々ではあるが、コラボカフェ内で実施することでコラボカフェ利用者の認知度が増加して相談へ繋がっていることが考えられる。また参加者のアンケート評価から、気軽に相談できる機会であるとともに様々な悩みを話す機会となっている様子が伺えることや、一度参加された方がリピーターとして繰り返し相談に来られていたりチラシやメールなどで開催の情報を得て参加されている様子から、今年度も個々のニーズに応じた相談をうけることができたと考ええる。

コラボカフェ開催時にはコラボカフェの保育士に子どもとの遊びや見守りについて協力していただくことで、親は安心して教員と話をすることができており、相談や交流の場として機能していたと考える。コラボカフェが休みの際は地域ボランティアに、子どもの見守りを依頼していたが、今年度は地域ボランティアへの案内が遅れたため、事務局職員が子どもの見守りとなった。利用者のニーズはある反面、利用者数が年々減少傾向にあることから、コラボカフェ開催日にまちの保健室が開催することも検討したい。

今年度は、12月以降「新型コロナウイルス関連肺炎」が世界的規模で報告されている。2月末日時点においても終息の見込みがないため、感染拡大の防止と兵庫県看護協会の通達も鑑み、3月の子育て広場を中止するに至った。

①-3 こころと身体の看護相談

○概要

「こころと身体の看護相談(以下、看護相談)とする」は、平成19年6月より開催している。広報活動は、神戸市看護大学前掲示板及びホームページへの掲載、「ま

ちの保健室」のポスターへの情報掲示の他、「看護相談」独自のポスターを作成して、大学共同利用施設内掲示板をはじめ、大学所在地の自治会を通じて西区を中心に大学周辺地域にある商業施設や診療所等の掲示板、回覧板への掲示・掲載をおこなっている。

○活動日時

毎月1回、12枠、年12回開催している。相談時間は一人当たり40分で、今年度は主に木曜日（都合により曜日の変更有）の13時30分～14時10分、14時20分～15時、15時10分～15時50分、16時～16時40分で行っている。相談は予約制であり、月曜日から金曜日の9時～15時の間に大学の事務局に電話をする、来談時に次回の予約を取るという2つの方法をとっている。相談場所は、大学最寄り駅側の大学共同利用施設で、施設内の会議室や、講義室をパーテーションで区切ったブース内で、個別に面接を実施している。

○教育上の効果

相談を担当するのは精神看護学を専門とする看護教員及び大学院生である。初回に看護相談に来られた方に、「大学教員、または病院等で専門の臨床経験を積んだ精神看護専攻の大学院生がお話を伺います」という内容のパンフレットをお渡して、了解を得ている。大学院生は、初回は教員と2人で相談に入り、継続の場合は2～3回目から一人で実施している。相談終了後に振り返りを行い、教員から助言等を受けて次回の相談につなげている。地域住民を対象とした月1回の看護相談は、精神看護専門看護師を目指す院生にとって、アセスメント能力や面接能力を向上させる上で効果的な学びの機会となっていると考える。今年度は、大学院生がいなかったために、院生による看護相談は実施されなかった。

○実績(表 1,2 参照)

平成19年6月から平成30年3月末現在の開催回数は147回となった。新規相談件数は、平成25年度20件、平成26年度25件、平成27年度13件、平成28年年度16件、平成29年度7件、平成30年度2件、令和元年度13件あった。

今年度の相談件数は59件、その内訳は新規相談13件、一旦終結していたが再開した相談13件、継続相談32件であった。65歳以上男性は14%、65歳以上女性は39%、65歳未満男性は12%、65歳未満女性35%、昨年度に比べて新規相談件数が増加しており、65歳以上の男性の相談者の割合が増加する一方で、65歳未満の男性相談者の割合が減少している。

表 1 年度毎相談件数（平成 25 年度以降）

年度 (平成)	平成 25 年度	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度	令和 元年度
相談件数	116 件	107 件	98 件	84 件	80 件	53 件	59 件
うち新規	20 件	25 件	13 件	16 件	7 件	2 件	13 件

表 2 令和元年度相談件数(59 件)の内訳

相談申し込み			相談終結	相談人数
新規	再開	継続		(延べ)
13 件	13 件	32 件	1 件	59 件

※本年度 3 月は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、兵庫県看護協会より活動中止の通知があり中止となった。

○評価

相談件数に関して、今年度は、一昨年、昨年と減少していた新規件数も増加がみられた。新規相談では、各々の相談に沿った助言とともに、専門の相談機関を紹介することにより初回で終了になったケースもあった。継続相談は例年通り多く、相談者の抱える問題を一緒に整理したり、目標を一緒に考えて取り組むなどをしており、馴染みの相談員と安心して自らの問題について話したり、考えたりすることのできる場となり、継続相談につながっていると考えられる。また、地域の高齢者が気軽に立ち寄れる場にもなり、高齢者の引きこもり予防にもなっていると考えられる。その他にも、本学の地域の方向けの研修会の参加者や地域ボランティアの方が相談に来られたこともあり、本学の地域貢献活動との相互効果があると考えられる。今年度は大学院生の不在もあり、それに伴い、相談件数の総数は開催数が少なかった昨年よりは増加したものの、例年と比較すると少ない結果となっている。

○課題

平成 19 年の開始以来、継続されてきた看護相談は、「身近な相談の場」として機能しており(三浦,2012)、依然としてそのニーズは高いと考えられる。今年度は、子どものかかわり方について相談に来られるご家族の相談や、継続相談は、従来通り、数年にわたるケースや、ご家族で入れ替わり来られるケースがあった。今後も、地域住民の方々の多様なニーズにも対応できるように専門知識や技術の向上を図るとともに、広い視野から、地域における看護相談の役割についても探求していくことが必要と考える。

<参考文献>

三浦藍,安藤幸子,中島友美,山岡由実,小倉弥生.(2012).神戸市看護大学“まちの保健室”『こころと身体 of 看護相談』の活動実績とその評価.神戸市看護大学紀要,16,69-76.

①-4 もの忘れ看護相談

○概要

「もの忘れ看護相談」は 2012 年 3 月より開設し、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるよう、教員が個別相談を実施している。2013 年度からは知識の普及啓発のためのミニ講義、2014 年度からは参加者同士の交流のため、意見交換の場を設け、活動を継続してきている。また、ボランティアとして参加した学生に対する教育の場となるようにしている。

○活動日時および実績

2019 年度の「もの忘れ看護相談」は下記日程の 14 時～16 時に開催した。ミニ講義を 30 分間実施し、その後に意見交換の場を 30 分程度設けた。個別相談希望者については、ミニ講義終了後、個別相談を実施した。

表 1 『もの忘れ看護相談』開催日およびテーマ

開催日	テーマ
5 月 8 日（水）	認知症ってなに？
7 月 3 日（水）	身近にできる認知症への対策
10 月 23 日（水）	もの忘れかも？と思ったら～相談や受診のこと～
12 月 18 日（水）	こんなときどうする？～認知症を有する人との接し方～

表 2 『もの忘れ看護相談』参加者数と運営人数（人）

開催日	参加者数			運営人数		
	65 歳以上	65 歳未満	計	教員	ボランティア	計
5 月 8 日（水）	10	2	12	3	協賛 1 学部生 6	10
7 月 3 日（水）	8	2	10	3	協賛 1 学部生 4	8
10 月 23 日（水）	6	0	6	2	協賛 1 学部生 1	4
12 月 18 日（水）	7	2	9	3	学部生 1	4

ミニ講義では、65 歳以上の自身のもの忘れが気になりはじめた方、配偶者や地域の知り合いのもの忘れが気になっている方の参加が多かった。講義の後は講義を担当した教員や地域包括支援センター職員も加わり、参加者同士で意見交換できる場を設けた。参加者は、「認知症の人にやさしいまち『神戸モデル』」について実際に活用した参加者の体験談や認知症対策のために日常生活の中で取り組んでいるアイデアの共有など積極的に情報交換をされていた。

表 3 個別相談者数（人）（複数相談者を含む）

開催日	新規相談	継続相談	計
5月8日（水）	1	1	2
7月3日（水）	3	2	5
10月23日（水）	1	1	2
12月18日（水）	4	1	5

表 4 主な個別相談内容と対応および助言内容

	主な相談内容	対応および助言内容
相談者自身に関すること	今後記憶が障害されていくことについて不安がある。今後の生活がどのように変化していくのかわからない。	検診や受診の具体的方法の提示、地域の社会的資源の紹介、日常生活の工夫等
家族に関すること	配偶者のもの忘れの症状が進行し、毎日の生活が大変になってきた。生活上の工夫を教えてほしい。	記憶障害の症状への対応方法、相談者自身の息抜きの必要性和方法、記憶保持の強化方法等

個別相談では、新規ケースと継続ケースとも主な相談内容は、相談者自身や家族の記憶障害の進行に対する不安とその生活の変化と対処方法に集約された。個別相談後も継続的に支援が必要と考えられるケースについては、次回のもの忘れ看護相談への参加を勧めることや、もの忘れ看護相談に参加している近隣の地域包括支援センターの保健師に繋ぎ、相談者が地域で安心して暮らせるよう大学と地域包括支援センターが連携した支援活動を行った。地域で生活する人にとって、地域の相談窓口を知ることや地域包括支援センター職員から情報提供を受けることは、困ったときの相談先が身近にあることを感じられる機会となっていた。2019年度の個別相談において、例年と比較し特徴的だったのは、神戸市の診断助成制度を利用した結果、2次検査を待っている人の家族や診断助成制度の具体的な利用方法がわからない人からの相談が寄せられたことであった。1次検査において認知症の可能性を指摘されたことや、診断助成度は知っていても具体的な行動がわからず世の中の動きについていけないと不安が増しているようであった。

○教育上の効果

「もの忘れ看護相談」では、認知症とともに生きる人への支援活動に関心をもった老年看護学分野の研究演習およびゼミナールの学生、講義に関心をもった2年生が学生ボランティアとして参加した。活動に参加することで、教科書だけでは学ばれないもの忘れや認知症とともに生きる本人とその家族の思い、生活上の些細な変化や不安を聴き、認知症の症状の先にあるその人たちの生活を知る機会となっている。また、そのような人々のニーズにどのように応えていくことが必要なのかを

学ぶ機会となっている。これらは、今後、もの忘れや認知症とともに生きる人々への看護を提供する上で、より実践的な経験となっていると考える。

○評価と今後の課題

「もの忘れ看護相談」の参加者は、ここ数年増加傾向にあり、学園都市近郊からの参加が多い。参加者のアンケート結果から、参加者のミニ講義に対する満足感が高く、ミニ講義は参加者にとって、認知症の知識、情報を修得する場やもの忘れや認知症に不安がある今の自分の状態を確認する場、安心感を得られる場となっていることがわかる。特に、2019年度に個別相談の相談者が増加したことをふまえ、今後も診断助成制度の情報の拡散、診断助成の利用者の増加とともに看護相談の利用者の増加が予測される。このような相談者に対し、不安の軽減に向けた具体的な対応をしていく必要がある。

一方、参加者自身も認知症について勉強されてから参加される方がほとんどであるため、今後はその方々の学習ニーズにも配慮した内容とする必要がある。さらに、日進月歩で変化する認知症に関する施策や治療方法、地域で活用可能な社会資源などの情報を参加者に分かりやすく伝え、参加者自身がそれらの情報を整理し適切に選択するためのサポーターとしての機能を果たすことも期待されている。

②コラボカフェ

○概要

本事業は、大学施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」として運営されている。現在、本学を含め神戸市内の 9 大学が本事業に参画している。本学は、2012 年にコラボカフェを開設した。名称である「コラボ」は、Collaboration の略であり、「大学の教職員と学生が地域住民および関連機関と共に」を意味し、「カフェ」は「子育て中の親子が一休みできる」場として機能することを目指して名づけられている。

○目的

コラボカフェは、大学施設を利用した学生と住民の参加を通して親と子が健康に育つための子育てを支援すること、および学生が生活を支援できる看護職として成長すること、また、それらにより大学の発展に寄与することを目的としている。

○実施事業

- a)子育て親子への場の提供と交流の促進
- b)子育て等に関する相談、援助等
- c)地域の子育て関連情報の提供
- d)子育て及び子育て支援に関する講習
- e)コラボカフェを活用した授業及び研究の実施

○運営方法

対象:生後2ヶ月から年度内に3歳になる子どもと、その保護者を対象としている。

開催日時:週3日(火・木・金)、10時00分から12時30分、13時00分から15時30分の日5時間開催している。

スタッフ:保育士4名が見守りを行い、保護者からの相談に応じている。

○実績

利用状況

2019年1月から12月末までのコラボカフェの開催日数は140日、年間の延べ利用者数は、保護者が2,648名、子どもが2,796名であった(表1)。このうち新規登録者は270名で、経年別にみると2018年は一時的に増加しているがほぼ年平均の人数であった。(図1)。一方、一日あたりの平均利用者数は保護者18.9名、子ども20.0名で、減少傾向がみられた(図2)。なお、月別の利用者数の推移をみると、3月と11月が多く7月が少ない、緩やかなM字カーブを示している(図3)。

学生の参加状況をみると、延べ参加者数は50名であった。学生は、講義・演習の一環として、子育て中の母親の体験などを知るためのインタビューをしたり、アルバイトとして子どもと遊びながら、一緒にプログラムに参加するなど、母子との交流を深めていた。

表1 月別の延べ利用者数(人)(2019年1~12月)

	保護者	子ども	新規登録 (再掲)	学生
1月	184	208	19	0
2月	239	268	23	0
3月	271	307	27	0
4月	221	230	22	20
5月	250	250	36	7
6月	214	223	30	0
7月	220	227	27	0
8月	177	181	20	9
9月	221	228	25	0
10月	251	254	24	8
11月	243	258	13	6
12月	157	162	4	0
年間計	2648	2796	270	50

図 1 新規登録者数の推移(2015～2019 年)

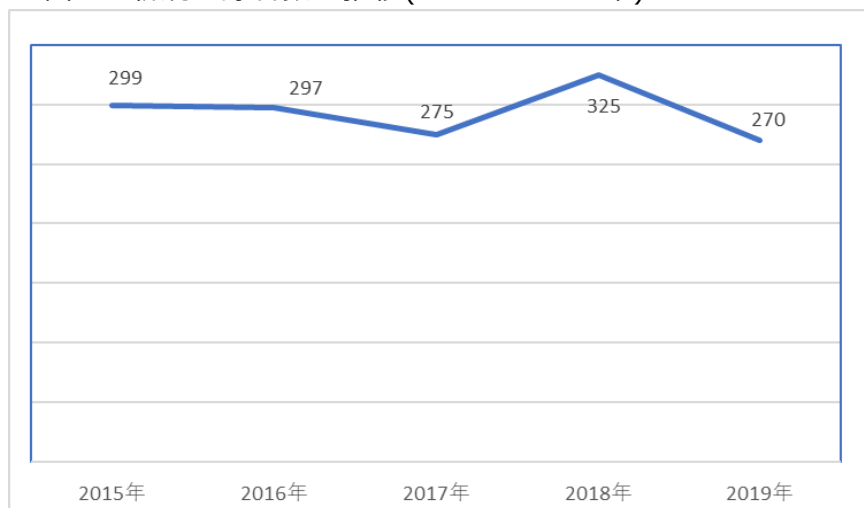


図 2 一日あたりの平均利用者数の推移(2015～2019 年)

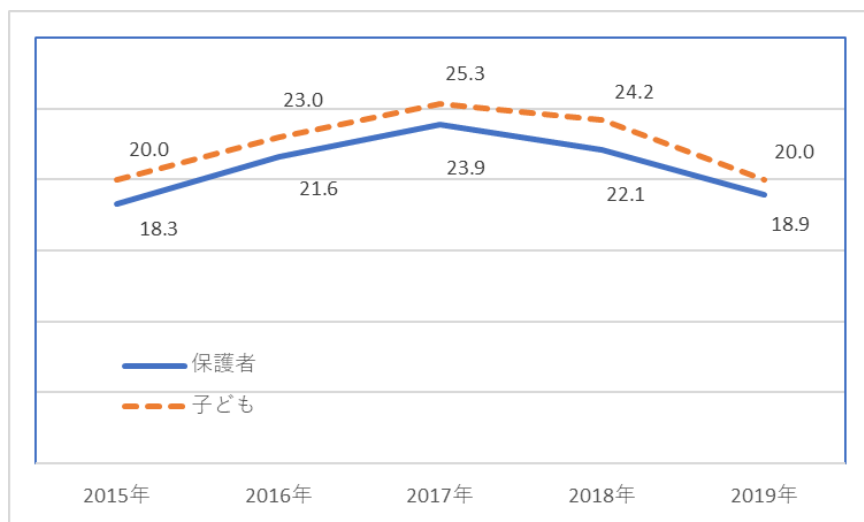
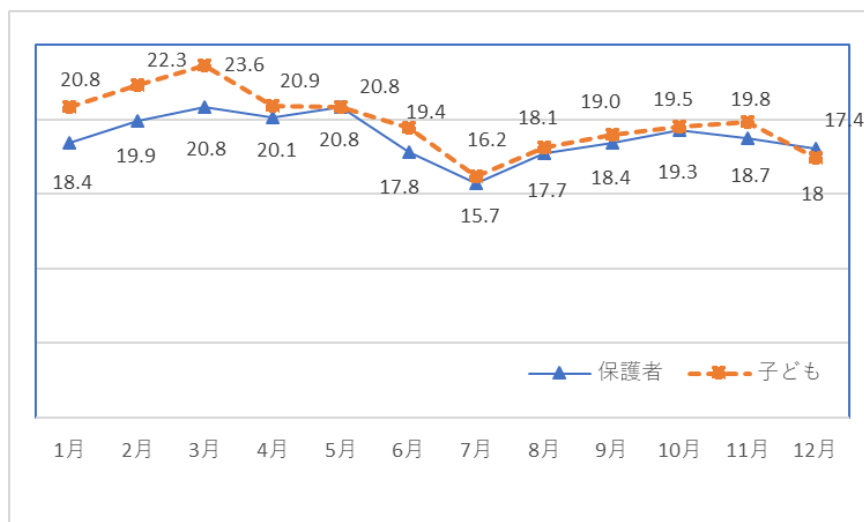


図 3 月別の一日平均利用者数（2019 年 1 月～12 月）



○開催プログラム

プログラムの企画テーマは、「親子の健康」「体力づくり」である。プログラムの企画・運営に際しては、教員と保育士とが、それぞれの専門性の違いを活かした内容を提供できるよう工夫した。また、春期には砂場遊び、夏期には水あそびをするなど、季節を感じられる外あそびを提供した。なお、毎週木曜日には、保育士によるふれあい遊び(手遊び、絵本の読みきかせ、紙芝居、パネルシアター、楽器遊び、ダンスなど)が実施された(表 2)。

表 2 2019 年度 開催プログラム一覧

日付	タイトル	参加数	担当及び外部講師
5月9日 (木)	授乳と卒乳、仕事復帰後の母乳	22組	矢野、沼田、事務局 宇城、金田)、 保育士4名
5月23日 (木)	子どもの体調が悪い時のホームケアのお話	18組 (祖母1名)	山本、岡永、事務局 金田、丸山)、 保育士4名
6月 8日 (土)	YMCA共催 親子でからだを使って遊ぼう 乳児編	30組 (父親15名)	YMCA担当者5名、藤本、岡永、 事務局 金田、宇城)、 学生アルバイト4名
7月 3日 (水)	七夕まつり	18組	保育士4名、 事務局 金田、土居原)
8月 1日 (木)	子どものこころの発達	17名	植本先生、石田、岡永、 事務局 金田、丸山)、 保育士 3名、学生アルバイト3名
8月28日 (水)	ベビーマッサージとおしゃべり	5組	國廣先生、沼田、岡永、保育士 2名、 事務局 金田、丸山)、院生2名
9月11日 (水)	子どもの靴選び	19組	椎野先生、丸尾、大瓦、岡永、保育 士 3名、事務局 金田、丸山)
11月2日 (土)	YMCA共催 親子でからだを使って遊ぼう 幼児編	22組 (父親14名)	YMCA担当者6名、丹野、岡永、 事務局 金田)、学生アルバイト4名
11月11日 (月)	第1回ペアレンティング	20組	井山先生、高田、事務局 金田、 土居原)、保育士 3名、院生2名
12月 9日 (月)	第2回ペアレンティング	21組	井山先生、沼田、事務局 金田、土居原)、保育士4名
12月18日 (水)	クリスマス会	26組	保育士4名、丹野、事務局 金田、土居原)
1月27日 (月)	第3回ペアレンティング	15組	井山先生、沼田、事務局 金田、土居原)、保育士4名
2月17日 (月)	第4回ペアレンティング	12組	井山先生、沼田、事務局 金田、土居原)、保育士4名
2月26日 (水)	ひなまつり	20組	保育士4名、事務局 金田、土居原)
3月11日 (水)	ベビーマッサージとおしゃべり	新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止	

○教員が企画・運営したプログラム

・「母乳と卒乳」のお話の会

ウィメンズヘルス看護学の矢野助教より「母乳と卒乳」についてのお話の会が実施された。最初の 15 分で来所者全員に向けて母乳の栄養、冷凍母乳、卒乳の方法についてのお話が行われ、その後、個別相談へと移行した。全体のお話ではマイクを使用したため、子どもたちが遊んでいる中でも、母親たちは集中して話を聞くことができていた。個別相談では、3 名の母親から質問があり、内容は職場復帰に向けての具体的な卒乳方法、次の子どもの妊娠と卒乳、離乳食を食べない場合の母乳との兼ね合い、哺乳瓶を嫌う場合の対応、授乳中の薬剤に関する質問があった。卒乳、離乳食の話では、質問者の近くにいる経験者に自らの経験を語ってもらい、コラボカフェ利用者のピアカウンセリングを促す関わりを行った。今回は、昨年多くみられた質問内容を全体への話に盛り込み、ポイントをまとめた持ち帰り資料を用意することで、一人一人にゆっくりと対応することができたので、今後も継続していきたいと考える。

・「子どもの体調が悪い時のホームケア」についてのお話の会

小児看護学分野の山本助教より、子どもの体調が悪い時（主に急な発熱、下痢・嘔吐）に家庭で気にかけてあげて欲しいポイントについて 20 分程度の話をしてもらった。内容は、解熱剤使用のタイミングや体温調節について、発熱や嘔吐時の水分補給や食事について、嘔吐・下痢時の処理の方法、受診のタイミングについてなどであった。

参加者は話の内容をまとめた資料を見ながら、また、時折うなずきながら聴いておられた。全体での質問が 1 件であったため、個別相談で対応した。6 名の母親から個別に質問があり、家族間で感染が広がってしまうことへの対応について、嘔吐で汚染された衣類等の洗濯方法、「ぐったりしている」状態の判断について、これまで経験された状況での受診のタイミングについて、などの内容であった。参加者同士でも、自身の経験を振り返って共有する様子があり、どの年齢層の子どもをもつ参加者にとっても興味深い内容であった様子が伺えた。

・第 1 回 「親子でからだを使って遊ぼう（乳児編）」

参加者は 30 組中、15 組が父母揃っての参加で、体育館で実施した。最初に公衆衛生看護学分野の藤本助教より、15 分程度で講話（発達促進のため、粗大運動を取り入れることが大切）があり、参加親子は比較的集中して話を聞いていた。

次いで、YMCA スタッフからオリエンテーションが行われた。そこでは、泣いたり他の子と同じように出来なくても心配する必要はないこと、親も一緒に楽しむことが大切であることが伝えられた。親子体操では、親が子どもと踊ったり、子ど

もが親につかまったりする動作があり、体操を通して親子が触れ合う工夫が随所に取り入れられた内容であった。なかなか経験できないマットやパラバルーンを用いたダイナミックな遊びに、子どもだけでなく親も興味深々であり、全体に笑い声が溢れていた。サーキットでは、参加者同士の距離感が縮まり、親は他の子どものためにトンネルを作ったり、親同士声をかけ合ったりする様子がみられ、遊びを楽しむ中で交流も生まれた様子であった。最後は、大型絵本でクールダウンを行い、その後、学生から参加賞としてメダル（保育士作成）の贈呈を行った。

学生（学部生アルバイト）は、子どもの安全性の確保のために、乳幼児の目線でパーテーションを設置したり物品を配置するなど、対象者に合わせた会場準備を心掛けていた。また、親子と一緒にになってプログラムに参加する中で、最初はぎこちなさが見られたものの、遊びを通して親子と触れ合いコミュニケーションをとる姿がみられていた。

プログラムを通して、父親が子どもに必要以上に手助けをしたり、子どもへの接し方に戸惑う様子があった。今後参加者を父子に絞り、父親をエンパワーするプログラムにするなどの検討が必要である。



・「子どものこころの発達」のおはなし

例年好評のテーマを今年も企画し、17組の参加があった。講師の要望もあり、今年度は保護者が集中して話を聞けるように、学生会館（食堂）で会場を設定した。母親と離れることのできる年齢の子どもは、コラボカフェ内で学生（学部生アルバイト）や保育士が見守りをした。母子分離が難しい子どもは、母親に抱っこされながら一緒に話を聞いていた。

講話は30分で、子どもにとって安心感を与えられる親になること、子どもと一緒にいる時間を楽しむことの重要性について話をされた。その際には、子どもが頑張ることだけをほめるのではなく、焦らずに普通にしていることにも注目することが重要であることをお話しされた。全体での質疑応答はなかったが、個別相談では4組の母親が相談に来られた。



・「こどもの靴選び」について

参加者は18組であった。初めにこどもの足の発育と靴選びについて骨格モデル

や靴を示しながら話をされた。子どもの姿勢の発達には、ずり這いや高這いで体幹を強くすることが大切であり、歩き始めたら立つ、転ぶ、歩くを繰り返し、とっさの動きを身に着けること、また、はだしで走り回ったり、足をよく動かすことが足の発達にとってもよいという事であった。幼児の靴選びでは、柔らかい足首を支えるためハイカットでかかとが硬く、マジックテープや紐で足をしっかり固定できるもの、サイズは中敷きを足にあてて指先から 15 mmの隙間があるものを選ぶことが大切である。また、靴を履く際は靴べらを使用し、「かかとトントン」でかかたと靴を合わせた後、マジックテープなどでしっかりと固定することが大切であることが話された。

後半では講師が、希望者全員のこどもの足を測定し、現在使用している靴をみながら、今後の靴選びのアドバイスを行った。参加者は、現在使用している靴がこどもにあっているのか、買い替えのタイミングなどを聞くことができて良かったという反応であった。



・第2回「親子でからだを使って遊ぼう（幼児編）」

参加者は 22 組中 14 組が父母揃っての参加で、運動場で実施した。最初に Y M C A スタッフより、発達促進の観点から、3 歳までの時期に、全身運動をしっかりと取り入れることが大切である旨のお話があった。その後、本日のプログラムについてオリエンテーションが行われた。参加にあたって、子どもによって発達は個人差があり、他の子と同じように出来なくても心配する必要はないこと、親も一緒に楽しむことが大切であることが伝えられた。サーキット遊びでは、グランドトラックで、跳び箱での階段昇降、棒ぶら下がり、トンネルくぐり、凸凹マットなどの障害物乗り越えなどが設置された。面白くてトラックを何周もする子もいた。自分の子どもについて行く保護者の方が大変な様子であった。

プログラムの最後に、子どもたちは、学生から参加賞のメダル（保育士作成）を首にかけてもらおうと、笑顔になる様子が見られた。

学生（学部生アルバイト）は、看護学実習で培った知識を用いて親子が安全に楽しめるように遊具の設営を行った。また、親子と一緒にプログラムに参加する中で、最初はぎこちなさが見られたものの、遊びを通して親子と触れ合いコミュニケー



ションをとる姿がみられていた。

・「ペアレンティング」のおはなし

本プログラムは、子育て中の親が気負わずにこどもを育て、自分自身が親として成長することを楽しめるように支援する目的で企画した。4回シリーズに全て参加できる親を募集し20組が参加した。毎回参加者が減り最終回は12組であった。講義はレジュメを用い、参加者の「こどもにどんな大人になってほしいか」、「現在問題だと捉えていること」などついて、手持ちのワークシートへ記入してもらいながら進行された。参加者は、講師の話に聞き入り、大きくうなずいたり熱心にワークシートを記入したりと、全体的な関心の高さが窺えた。レジュメをもとに、次回までの宿題が出された。講義終了後は、2～3名が個別に講師に質問・相談をされて、プログラム全体が終了となった。

保育士に、プログラム中の子どもの遊び相手をしてもらった。途中、泣き出す子どもがいたものの、ほとんどの参加者が講義とワークとに集中できていた。

・「ベビーマッサージ」

1歳までの子どもと母親10組程度を対象に、8月と3月に企画した。初めに手遊びや絵本の読み聞かせを行い、雰囲気が和んだところで、自己紹介をそれぞれ行った。手遊びの途中でオイルを児の内大腿部に10円玉程度塗り、自己紹介後に発赤、腫脹がみられないかを確認し、ベビーマッサージを開始した。マッサージ中は、母親たちは熱心に講師の声に耳を傾けつつも、和やかな雰囲気で我が子に語り掛けながらマッサージを行っていた。

マッサージ終了後は30分程度、育児に関する質問に対し、講師や他の参加者の経験も交えてどのように対処したらよいかを共に考えていくという時間がとられた。質問の内容は、子どもの食事量、夜間の授乳や卒乳についてであり、月齢の低い児の母親は、月齢の高い児の家庭での様子や工夫等、知恵を出し合うことができていた。

児がマッサージを受けたくない時は、抱っこしてできるマッサージや身体遊びを紹介して対応していたため、適宜個別に関わっていくことが必要である。

3月のベビーマッサージは、新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止した。



○保育士が企画・運営したプログラムについて

・七夕まつり

18組の親子が参加され、顔見知りのお母さん同士の会話がはずんでいた。七夕まつりのために、立派な笹竹を保育士が準備されていた。プログラムは、導入として、保育士と一緒に踊るフラダンスは、和やかな雰囲気の中で音楽に合わせて踊っていた。その後はアンパンマンゲーム、短冊作り、うた、楽器あそび、3匹のこぶたのパネルシアター、ハンドベル演奏が実施された。子どもたちは、パネルシアターやハンドベルに、近づいて、話や演奏に注目していた。

プログラム終了後、参加者が願い事を記載した短冊を飾り付けした笹の一枝を、それぞれ持ち帰った。



・クリスマス会

26組が参加された。カフェ内は、クリスマスらしく楽しい雰囲気で、子どもたちはサンタの衣装を着てきたり、クリスマスカラーの服だったり、母親も楽しんで参加している様子が窺えた。まずは、オープニングシアターでクリスマス会のムードが高まり、手品、ダンス、エプロンシアター、ハンドベル演奏、ゲームあそびと続いた。全体を通して、親子と保育士とが一体となって楽しむことができた。また、最後にサンタクロース(丹野准教授)が登場すると、親子ともに盛り上がり、子どもたちはプレゼントをもらって大変嬉しそうであった。プログラムが多彩で充実しており、後半になっても子どもたちが集中して参加できていたことから、参加者の満足度が高い内容であったと考えられた。



・ひなまつり

参加者は20組であった。オープニングの「おはながわらった」では、保育士さんの歌の後、保育士さんが描いたお花のイラストの名前を当てる「お花当てクイズ」で盛り上がった。エプロンシアターは親子とも引き込まれ、保育士さんのそばで興味津々となっている子もみられた。また、保育士さんと一緒に楽しく歌ったり、ハンドベル奏の「ミッキーマウス」は親子とも聴き入っていた。「おひなさまを作ろう」では親子で楽しそうにおひなさまかざりを作る様子が見られた。「おひなさま作り」は、おひなさまとおだいりさまの絵の顔の部分を切り抜き、子どもたちがお母さんと手をつなぎ順番に絵のところへ行って花のシールを貼り、親子とも楽しんだ様子

だった。最後におひなさまとおだいりさまの顔をくりぬいた穴から子どもたちが顔を覗かせ、それをお母さんたちが自由に写真撮影をして終了した。新型コロナウイルス感染症への危惧もあり、キャンセルが生じた。

○評価

今年度は、全体的な利用者アンケートは実施していないが、プログラムごとの参加者の反応からは満足度の高い内容であった。早朝から暑さが厳しい7月は、1日の平均利用者数が減少していたが、過ごしやすい時期に利用者数が増加していることから、コラボカフェの認知度が地域に定着してきていると考えられる。

12月以降、新型コロナウイルス感染症防止対策を心掛けていた。2020年2月時点も終息のめどが立たないため、2月27日午後より3月20日までコラボカフェの臨時閉鎖の対応とした。

○今後の課題

本事業の目的の一つには、「学生がコラボカフェに参加することを通して、地域住民の健康な生活を支援する看護職として成長する」ことがあげられている。これまで、教員や大学院生によるコラボカフェ事業を活用した研究成果の公表はない。4月は、学生(学部生・大学院生)が授業の合間に気軽にコラボカフェを訪れているが、授業や演習、実習等が重なると本事業の活用は難しい。新カリキュラムを導入時に、学部生や大学院生の授業や演習でコラボカフェの活用を提案するなど、大学としての取り組みを明確にすることが今後の検討課題である。

③プレパパ・プレママセミナー

○概要

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Ⅰの授業の一環で、セミナーの企画から運営まで大学単独で実施している。セミナーの目的は、神戸市の地域住民（妊婦とそのパートナー）に妊娠期から子育て期を見越したセルフケア獲得への意識を高められるような、集団指導技術の実践的技術を助産学実践コースの学生が習得することである。

○実績

今年度は、2019年8月31日に、大学院2年生が担当し、2020年2月9日には、大学院1年生が中心となり、各日2回ずつ計4回のセミナーを、神戸市在住の妊婦とそのパートナーの計27組を対象に開催した。2019年8月31日には、「I'm OK! ~私のマタニティライフ~」を、2020年2月9日には、「つながる、私のお産」をテーマとし、妊娠期の体の変化と過ごし方の話、分娩期の体の変化と過ごし方の話、沐浴体験を行った。

妊娠期から出産、産後の身体のがつながりが伝わるように血液循環動態などの生理的变化やバランスのとれた食事の大切さを説明した。また健康なからだ作りのため

の食事について参加者が生活に取り入れやすい方法をグループワークで話し合った。お産については、分娩の始まりから進み方の説明を行い、お産のイメージを促した。またその中で安楽な分娩期の過ごし方や産痛緩和のためのマッサージを実践した。沐浴体験では沐浴の手技を覚えるのではなく、沐浴をすることが楽しみと参加者が感じられるよう楽しい雰囲気の中で1人ずつ学生が側について沐浴体験を質問に答えながら行った。

参加者からは、「実践的なことを体験でき、お産やその後のイメージがとても沸いた」「私1人の出産ではなく、パートナーにも意識が芽生えるような内容になっていてとてもよかった」等の意見をいただき、セミナー参加の満足度は高かった。学生は、参加者に問いかけや体験を取り入れながら説明を行ったことで、参加者と共にセミナーを進行できたと感じていたが、より分かりやすく伝える方法を強化すべきであると感じていた。

○教育上の効果

学生はそれぞれが役割分担をしながらセミナーを企画、準備することを学び、グループダイナミクスを用い集団指導技術を向上させることができた。本セミナーは、8月が2年生、2月は1年生が主体となって実施している。1年生、2年生ともお互いのセミナーの事前練習に参加することで、意見を出し合い内容をブラッシュアップすることができよい相互作用が見られた。セミナー全体を通して、テーマの一貫性をもつこと、対象者のセルフケア能力の向上につなげるために、限られた時間の中で、対象者へ伝える内容や方法について考え、助産師が行う健康教育について実践を通じた学びにつながった。

○今後の課題

体験型を取り入れたプログラムを継続しつつ、すべての参加者の目標が達成できるように、その内容、方法、プログラム全体の構成まで再考する必要がある。

④竹の台ふれあいまつり

○概要

竹の台ふれあいまつりは、「竹の台地域委員会」が主催で実施されており、平成18年から本学のブースも設けて、大学院助産学実践コースの学生が中心となりボランティアとして参加している。

○実績

竹の台小学校にて、10月14日（月）に第17回竹の台ふれあいまつりが行われた。神戸市看護大学大学院看護学研究科博士前期課程ウィメンズヘルス看護・助産学専攻の院生8名、ウィメンズヘルス看護学分野の教員5名がボランティアとして参加した。

内容は「赤ちゃん人形抱っこ体験」、「アロマハンドマッサージ」と「学生によるオレンジリボン運動」を実施した。学生によるオレンジリボン運動は、子どもを産み育てる若い世代にも児童虐待問題に関心を持ってもらうことを目的とした啓発運動であり、本学は平成 25 年から活動を開始し、今回で 5 回目の活動となった。アロマハンドマッサージは今年も 100 人前後の方に実施することができた。参加者の中には、「昨年マッサージしてもらって気持ちがよく今年も楽しみにして来ました」と言われ、友人を連れて参加される方もいらっしまった。赤ちゃん抱っこ体験では、家族連れや、小学校低学年の子どもから恒例の方々が抱っこされ、「こんな小さかったかな」「抱っこしていると愛着が湧く。可愛いね」と笑顔で子どもや孫の赤ちゃんの時期を思い出されたり、小学生も「思ったより重い」と言いながら、自分たちが成長してきた過程を知る機会となっていた。学生によるオレンジリボン運動では、事前に学生が作成していたオレンジリボンを、アロマハンドマッサージの待ち時間や赤ちゃん人形抱っこ体験時に、オレンジリボン運動の趣旨や神戸市の児童虐待の現状を説明しながら、リボンおよびリーフレットを手渡した。また、学生と教員もオレンジリボンをつけながら活動し、児童虐待について住民の方々に知ってもらえる機会となるよう声掛けを行った。

○教育上の効果

アロマハンドマッサージや赤ちゃん抱っこ体験において学生は、幅広い年代の対象者とコミュニケーションをとりながら、相手の反応に応じて声掛けやマッサージを工夫し、コミュニケーション能力の向上やマッサージのコツの習得する機会となった。また昨年度マッサージを受けた方が今年は友人を連れてきてくださっている様子に、学生は継続することでの地域の方とのつながりが増えていくのを実感していた。オレンジリボン運動を行うにあたって、事前学習をしたことで児童虐待の現状を知り、今後母子関係に携わっていく助産師という職業の責任や役割を再確認する機会となった。

○今後の改善

竹の台ふれあいまつりへの参加は、地域住民と触れ合い、生活の場を理解する機会となる。また母子に関わる専門職としてのボランティア活動について考える機会となるため、今後も継続して実施していく。今年度は雨天順延のため予定していた学生ボランティアが参加できず学部生のボランティア参加がなかった。ボランティアの募集が掲示物、学部 3 回生の実習時に声をかけ公募しているが、次年度はより参加者が増えるように、募集の工夫が必要である。

オレンジリボン運動において、「赤ちゃん抱っこ体験」「アロママッサージ」に来られた参加者にリーフレット、オレンジリボンを配布し活動の説明を行ったが、対象は 100 名前後と少なかった。次年度は、コーナーだけでなく会場を巡回しながら、より多くの参加者に活動を知ってもらい、身近な問題として捉え地域の方の見守り

が虐待の予防につながるという認識を持っていただく機会にしたいと考える。

⑤命の出前講座

○概要

命の出前講座は、西区内の小学 4 年生・5 年生を対象に、助産学専攻科で「思春期健康教育論」を選択履修した学生が思春期にある地域住民に対して健康教育を実施する健康支援活動として始まった。現在は大学院助産学実践コースの大学院生が引き継いでいる。

○実績

対象校は小寺小学校であった。第 1 回目は令和元年 10 月 24 日（木）、5 年生 74 名に対し実施した。参加者は、大学院 1・2 年生、計 6 名で主には教員が企画の要点を作成し、実施は学生と教員で行った。第 2 回目は 10 月 31 日（木）、4 年生 73 名に対して授業を行った。参加者は大学院 1・2 年生、計 11 名であり、健康教育の企画・運営について大学院生が全てを実践した。

○内容

授業の目標としては、二次性徴をこれから経験する、またはしている自分や他者の体や心の変化を理解し、互いの違いについて知ることである。また、本授業の体験から、命の大切さを考える機会につなげることである。5 年生では第二次性徴に関するクイズを取り入れた参加型の授業を行い、中盤では院生による出産の劇を行った。その後、院生と小学生で小グループになり、小学生からの質問に答えた。出産の劇は出生・命について考えるきっかけとなり、劇の最後で赤ちゃんが生まれた時には周囲にいた小学生たちがみんなで新しい命を抱っこする盛り上がりを見せた。

4 年生の月経教育では、男女の体の違いについて学びを深め、月経時の手当てについて実際に生理用品を用いた演習を行った。授業後の感想では、思春期に起こる「体の変化や違いを知れて良かった」「成長には差があることがわかった」など違いを知り、お互いが大切な存在であることに気づいていた。授業にも活発に参加しており、小学生自身が自分の体に関心を持っていることが推察できた。

○成果

企画・準備・実施の一連の過程を主に大学院 2 年生が行ない、1 年生も授業に参加することで、次年度には 1 学年大きくなった児童に再会するという方法を継続している。大学院の学生たちは、思春期の過程を継続的に学ぶことが期待でき、児童にとっても継続した学びを得ることにつながる。また実際に生理用品を用いた演習は児童らにとって貴重な経験となり、男女による第二次性徴の違いを学ぶ機会となった。

⑥西区ヘルスアップ作戦

○概要

西区ヘルスアップ作戦は、地域住民の健康寿命の延伸と QOL の向上を目的とした事業である。本事業は、平成 17 年に神出地区、平成 18 年に学園都市地区、平成 19 年に櫛谷地区と平野地区、平成 20 年に押部谷地区、平成 21 年に玉津地区、平成 22 年に伊川谷地区の各地区にて、西区役所と地域住民、本学が協働して活動を開始した。

事業開始当初、地域住民から健康づくり活動を推進する「ヘルスアップ推進員」が選出され、各地区で健康づくりの活動が実施された。現在は、地域住民が参加しやすい健康づくり活動と健康に関する啓発を、各地区が地域の特徴や行事に合わせ、独自のスタイルで行っている。本学は、学園都市地区のヘルスアップ推進会議に参加し、「学園都市ヘルスアップ作戦」の活動を共に行っている。

○学園都市ヘルスアップ作戦

学園都市ヘルスアップ作戦は「10 年後のあなたを輝かそう！」をスローガンに、今年度 13 年目を迎えた。活動の目的は、地域住民が地区をより知りながら、楽しく健康づくりを続けることである。その内容は、毎月「学園都市ヘルスアップ探訪ボラボラ」ウォーキングを開催している。各回のコースは、地域住民がより参加しやすいよう趣向を凝らし、「学園都市周辺コース」と「遠出コース」を隔月で設定している。コース詳細の決定は、学園都市ヘルスアップ作戦推進会議にて行われ、各回の目的地（ゴール）とウォーキング時間の算出、坂道や休憩所を勘案した負荷の検討を行っている。初めて設定するコースは、ヘルスアップ推進員が実際に歩いて下見を行い、参加者の安全の確保とウォーキング効果を確認している。各回の実施後には振り返りを行い、参加者の状況と効果、さらに解決すべき点を明確にして、その後の活動へ活かす工夫がされている。これら活動は、健康づくりの参加者の増加と継続した健康づくりを推進する拠点となり、地域に広く浸透し定着している。そして学園都市地区内では、「すこやか体操」「太極拳」が学園東町地域福祉センターにおいて開催され、また「セルフコンディショニング」「チェア体操」「交流広場」が学園西町地域福祉センターにて開催されている。

学園都市ヘルスアップ推進員は、地域住民の健康づくりの意識の拡大と継続した健康づくりが行えるよう、日々丁寧なアプローチを行っている。今後も学園都市ヘルスアップ作戦は、地域住民の健康意識の向上と人々の交流の推進を図り、さらに充実した健康づくり活動を推進する基盤として継続される予定である。

⑦トライやる・ウィーク

○概要

トライやる・ウィークは、兵庫県下の中学校 2 年生が地域を学びの場に、体験を通

して、自ら学び、考え、体験する教育の一環として実施されている。生徒一人一人の興味・関心に応じて「職業体験」「農林水産体験」「文化芸術創作体験」「ボランティア・福祉体験」などの社会体験活動を5日間各事業所にて行われる。それによって、学校ではできない様々な活動に挑戦し、豊かな感性や創造性を高めたり、自分なりの生き方を見つけたりすることができるよう支援し、ともに生きることや感謝の心を育み、自立性を高めるなど「生きる力」を育成することが目的とされる。

○実績

令和元年度においては、本学における3日間トライやるウィークの実施内容は、施設見学、図書館での業務補助、コラボカフェでの子どもの見守り補助などを行った。各年度の詳細日程は下記に示した。また教科において、看護学授業見学、専門基礎科目実験準備・実施など本学全体を知る幅広い体験をした。

本年度のトライやる・ウィークに参加した生徒達の感想として、

「看護大学の皆様はすごく親切で、施設も綺麗で、とても良い所だと感じました。図書館での作業や、実験、講義、English Lunch など、貴重な体験をたくさんさせて頂けて嬉しかったです。特に中学の理科実験とは全然違って本格的で、今まで知らなかったことをたくさん知ることができました。」

「一番心に残ったのが English Lunch です。初めは、英語で話すことに緊張したけど、クロスビー先生やたくさんの先生方のおかげで体で表現しながら楽しく会話することができました。この体験を活かし、これからの活動を積極的に取り組みます。」

「この三日間は本当に楽しくて、すごく良い思い出となりました。また、看護のお仕事にも興味が出てきました。」

本年度のトライやるウィークの感想より看護大学での3日間の体験を生徒たちは好感をもちつつ積極的に受け止めたことがわかる。また、看護大学における教育・研究・組織運営・地域貢献の内容と看護大学設立の意義について少し理解できたものと思われる。このように、今回のトライやる・ウィークが、看護職を身近に感じ、生徒たちの将来について考える一助となれば幸いである。

2019 年度 トライやるウィーク スケジュール

		時間	項目	内容	担当
11 月 12 日(火)	1 限	9:00～ 10:30	ガイダンス	概要説明 大学案内等	武藤係長
	2 限	10:40～ 11:40 11:40～ 12:10	トライやる	保健医療福祉 行政論(60 分) 実験準備(30 分)	波田(教員) 丹野(教員)
	3 限	13:10～ 14:40	トライやる	コラボカフェ	コラボカフェ保 育士
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局 金田氏
11 月 13 日(水)	1 限	9:00～ 10:30	トライやる		図書館
	2 限	10:40～ 12:10	トライやる	水道水中残留 塩素分析	丹野(教員)
	3 限	13:10～ 14:40	トライやる	学内作業	事務局 榊氏
		14:40～	まとめ	活動日誌作成	事務局 金田氏
11 月 14 日(木)	1 限	9:00～ 10:00 10:00～ 10:30	トライやる	周手術期看護論 (60 分) 実験準備(30 分)	野寄(教員) 丹野(教員)
	2 限	10:40～ 11:50	トライやる	食肉加工品中 食品添加物分析	丹野(教員)
		12:00～ 13:00	トライやる	食堂体験 English Lunch	金田氏、丹野 クロスビー(教 員)
	3 限	13:00～	まとめ	反省会 活動日誌作成	岸本課長

⑧ こうべ生涯学習カレッジ（コムスタ神戸）

○概要

神戸市内にある 12 大学による大学連携セミナーとして、各校の教員の様々な専

門分野を活かした講義を「こうべ生涯学習カレッジ」として提供しており、本学も2012年度から参加している。

○実績

今年度は、2020年2月19日（水）13:30～15:00に「子どもの認知発達と関わり方を考える」をテーマに、療養生活看護学領域小児看護学分野の岡永真由美准教授が講義を行った。参加者は86名（年齢は70代が中心、女性の参加者がやや多め）で、主に講義中心の内容であったが、参加者の反応は、おおむね好評であった。愛着理論や認知発達理論、自我発達理論を踏まえて、子どものコミュニケーションの特徴や遊びの発達段階、おもちゃの選び方について、事例を交えて講義を行った。参加者は、身近な子どもたち（孫、地域活動で関わる子どもたち）との関わりから、納得されることもあり、講義への反応は良かったものと思われる。

⑨ユニティ講座

○概要

神戸研究学園都市大学交流促進協議会（UNITY）の公開講座は、市民の生涯教育を振興するとともに、加盟校の最新の研究成果を市民に還元することを目的として、1999年度から開催しており、各加盟校がそれぞれの研究分野のテーマに即して、原則として毎年1講座（5回シリーズ）の企画・実施をしている。

○実績

2019年度は、本学専門基礎科学領域教員5名がオムニバス形式で担当した。

「私たちの健康と最近の話題」をメインテーマに、私たちの健康問題について各講師の専門分野からの新しく多様なアプローチについて講義した。講座では、基礎医学領域、臨床医学領域、社会医学領域の多岐にわたる分野について、各講師が自身の分野の新しい知見を専門的な立場からわかりやすく紹介した。本講座を通じて受講生である市民の方々が、自身の健康問題を考えるヒントを得られることの一助となればと考える。

2019 年度 UNITY 公開講座・神戸市看護大学担当分

テーマ	私たちの健康と最近の話題		
講座概要	私たちの健康問題について各講師の専門分野からの新しく多様なアプローチについて講義致します。		
回	テーマ	担当講師	各講義概要
1	細胞の「数」から見た動物の体の成り立ちと疾患 ～がんと認知症を中心に～	二木 啓	体を構成する細胞の数は動物の種類によって、また同じヒトであっても個人で異なる。本講座では、体や臓器の細胞数を左右する「細胞の分裂・増殖」「専門的役割を担う細胞への分化」「細胞死」について、量的な視点から考える。また、それらと関連の深い疾患である「がん」と「認知症」を例に、細胞数の異常の程度や、そのメカニズムについてどのように考えられているのか、新しい考え方や治療法の現在も含めて紹介したい。
2	過剰診断／過剰診療について	櫻田美雄	「過剰診断／過剰診療」を保健・医療社会学とリスク社会論の観点から解説します。 1) EBM（根拠に基づいた医療）と過剰診断・生命的利益を生まない「検診／診断」がある（甲状腺ガン検診等）、 2) 反論：「個別性＆不安の解消の為」福島県甲状腺癌検診、 3) 「俺」の3側面（生命、生活、人生）の観点（QOL（生の質）の最大化の観点 4) リスク社会論：「自分の人生のリスクを自分でコントロールすること」を強いられる現代
3	高血圧症：予防と治療	谷 知子	高血圧は生活習慣病の一つであり、循環器系疾患の最大の危険因子です。このため、高血圧の予防および適切な診断・治療はとても重要です。当講座では、高血圧についての基本的知識および高血圧に関連した疾患について説明します。
4	水俣病問題から学ぶこと～フクシマに生かすために～	丹野恵一	水俣病は、水俣湾の特殊な地理的条件において在来産業である漁業と国策により繁栄した化学工業の接点に発生した中枢神経系疾患である。工場排水によって汚染された水俣湾産魚貝類を多量摂取したことによる有機水銀中毒である。患者公式発見（1956年）から60年以上たった今なお、水俣病被害者救済特別措置法による救済申請者は3万人以上にものぼる（2012年7月申請締切り）。本講では、水俣病問題の今日までの歴史を述べる。そして水俣病とフクシマの問題の共通性と水俣の教訓をフクシマへ生かす可能性について言及したい。
5	健康の新常識	加藤憲司	医学の研究はまさに日進月歩です。かつて常識だった健康法や知見などが、次々と覆されているという現状があります。この講義では、予防医学・健康科学を専門とする講師が、最新の医学研究の結果に基づいて、これからの健康常識を解説します。皆さんの生活習慣の工夫や改善にお役立っていただければと思います。
各大学担当日程			
【神戸市看護大学】 4/6、4/13、4/20、4/27、5/11 * 毎土曜日 14:00～15:30			

⑩看護専門職講座

○テーマ

「めざそう地域を一地域に根差した看護と介護の実現」

講師：本学企画戦力室室長代行 中野悦子先生

北須磨訪問看護・リハビリセンター所長 藤田愛先生

社会福祉法人駒どりの巡回サービス管理者 徳山聡美先生

○実績

日時：2019年9月21日（土）

場所：本学西館講義室

参加者：60人申し込みがあり、56人参加（そのうち7人当日参加）

（回答者51名の内、臨床の看護職23名、その他、介護職、ボランティア、サポートセンターコーディネーター、主婦等）

講演内容：前半は各シンポジストの講演、後半をディスカッションというシンポジウム形式で開催した。前半ではまずは、本学企画戦力室室長代行の中野悦子先生よ

り、「医療介護サポートセンターでの経験」について、次に、北須磨訪問看護・リハビリセンター所長の藤田愛先生より、「在宅ケアにおける訪問看護師の役割と実践」について、最後に、駒どり巡回サービス管理者の徳山聡美先生より、「地域住民の介護を「面」で支えるヘルパーの活躍と今後の課題」について、ご講演いただいた。講演会では、様々な事例を用いた地域での支援の実際に、参加者の多くが熱心に耳を傾けていた。また、後半のディスカッションでも、会場より医療介護サポートセンターとあんしんすこやかセンターの違いに関する質問など、活発な質疑応答が行われた。

アンケート結果：多くの参加者が良かったと回答し、「講義内容が具体的な話を織り交ぜていたのでわかりやすかった。定期巡回大変だと思いますががんばって下さい。」「その人らしい最期を迎えるために訪問看護、介護の巡回、多職種の連携でその人と家族を支えていることの重要性を改めて感じました。」などの自由記載を頂いた。他方で、「講師の方の声が、三人とも聞き取りにくかった」、「時間が押してしまってディスカッションが短かった」、「看護専門職講座よりも市民公開講座としての企画でもよかったように思いました」等のご意見も多数頂いた。

⑪ 出前健康講座

○ 概要

本学では、市民や地域団体などの学習意欲にこたえるため、大学教員が地域に出向き講演する出前健康講座を行っている。この出前講座は本学地域連携教育・研究センターを窓口として依頼があったものを対象としており、主催者や地域からの要望を伺いながら、できるだけニーズにこたえられる教員を派遣するよう努めている。2019 年度の出前講座は以下の 1 件であった。

今後も継続して地域に出向いて地域貢献活動を行っていく方向であり、より充実した健康知識や情報を住民の方々に提供していけるよう努めていきたい。

○ 実績

日時：2020 年 2 月 15 日（土）13：30～15：00

担当：丸尾

場所：たけのパーク

参加者：地域住民 23 名

講演内容：竹の台地域員委員会が月に 1 回開催している「めざせ！Happy100 年人生 高齢にかかわる勉強会」から依頼を受けて担当した。テーマは「人生の最期は自宅で過ごそう！知ってください！訪問看護！」であった。内容は、1. 知っていますか？「人生会議」2. 少しだけ 人生の最期を一緒に考えてみませんか？3. 訪問看護とは？であった。講座後には参加者から積極的な質疑があった。中には、自分の地域ではどこが往診や訪問看護をしてくれるのかといった意見があり、他の参加

者から「自分はこうした」といった情報交換も積極的に行われた。地域委員会からは初めて勉強会に参加した方も複数いたことから、関心の高いテーマでよかったと評価を得た。

⑫HAT 神戸復興住宅における出前講座

○概要

本講座は平成 15 年よりボランティア活動を展開している H A T 神戸復興住宅において、連合自治会より高齢化が急速に加速している地域高齢者の介護予防にむけ健康講座を開催してほしいとの要請を受け実施した出前講座である。

○実績

本講座は 10 時から 12 時までのボランティア活動のうち 15 分～20 分を使い実施した。対象はボランティア活動に参加されている後期高齢期の住民で、ほぼ毎回継続して参加されている。参加人数は、毎回 11～13 名であった。

講師はボランティア部の顧問や副顧問が担当した。学生は講義の資料配布、演習時の見守りなどを担当した。今年度も昨年度に引き続き、健康寿命の伸延や介護予防に関連したテーマを 6 回取り上げた。

○テーマと時期

「糖尿病とサルコペニアのお話し」(5 月)、「"がん"について知ましょう」(6 月)、「知って防ごう、熱中症」(8 月)、「転倒予防～皆で楽しくいろはカルタ～」(9 月)、「肩の凝らない肩こりのお話し」(11 月)、「誰でもあるある排尿の悩みについて」(1 月)

今年度は新しい健康関連のテーマとして、がん、肩こり、排尿障害を取り上げた。あわせて後期高齢者の関心が高いフレイル予防、転倒予防、認知機能の維持のためのセルフケアについて紹介し、生活のなかで意識してもらうよう働きかけた。

○教育上の効果

健康講座の参加（会場準備、資料配布、車椅子の方や講師の声が聞き取りにくい住民へのフォローなど）を通して、学生は住民の健康への関心のあり方や高齢の対象にあわせた個別の配慮の必要性を学んでいた。

○今後の課題

現行の実施方法で変更が必要な点はないと考える。今後も高齢者の健康や介護予防など住民の健康ニーズに応じた健康支援の内容を継続する。



熱中症予防について講義している様子



肩こり予防のストレッチをしている様子

⑬COC+事業の成果

COC+[地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットホーム]プログラムでは、COC+の申請校として地域社会形成のための教育研究を先導する神戸大学、COC事業で実践的な取り組みを進める神戸市看護大学・園田学園女子大学・兵庫県立大学、さらに、自治体・商工会議所・工業会等の実践的人材育成を結合する為にひょうご神戸プラットホームが構築された。この取り組みにより、兵庫県の多様な地域課題の問題解決能力と実践力を有する人材の育成と地元定着を図った。具体的な取り組みは、住民としての資質を養う基礎カリキュラム、多様な課題に応え、専門分野で問題解決力と実践力を養う「歴史と文化」「自然と環境」「子育て高齢化対策」「安全安心な地域社会」「イノベーション」の5分野に関係するカリキュラムの開発と体系化を共同で行う計画であった。

COC+大学とCOCの3大学との連携活動は、「地域づくりの基礎知識」シリーズ5冊の刊行を行った。本学は、子育て高齢化対策領域として、神戸大学、園田学園女子大学と共にテキスト作成にかかわった。また、3大学間会議を定期的開催し、学生による報告会、北須磨地域での協働での健康測定の実施などを行った。事業協同地域就職率については、本学の場合、69.9%が県内に就職し、目標値にほぼ到達している。

本事業は、2019年度で補助金助成期間は終了するが、終了後も継続的发展が求められており、①事業協同機関によるアクティブラーニング、②事業協同機関の役割分担に基づく講師派遣や教材執筆、③外部資金獲得の強化などである。

A decorative graphic consisting of two blue circles of different sizes, each with a darker blue center and a lighter blue outer ring. Two thin blue lines intersect at a point between the circles, forming a V-shape. The lines extend from the top left and top right towards the intersection point.

II. 教育・研究活動

教育・研究活動の概要

教育に関わる主たる活動は、地域住民が本学の講義・演習・実習にボランティアとして参加する「教育ボランティア導入授業」である。

教育ボランティアに関しては、教育ボランティアの募集・登録、教員への導入授業の実施の呼びかけと取りまとめ、教育ボランティアニュースレターの発行、教育ボランティア交流会の開催がある。また、今年度は教育ボランティア導入授業を大学の取り組みとして始めてから 10 年目の節目を迎えたことから、総括として教育ボランティア座談会を実施した。

研究に関わる主たる活動については、各々の教員が教育ボランティア導入授業等の教育活動と連動して研究を行うことを期待しているが、各々の教員の実施状況に任せており、現在はセンターとしての支援は行っていない。

活動実績

①教育ボランティア導入授業

○概要

教育ボランティア導入授業は、2006 年度に採択された現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（現代 GP, 文部科学省）「地域住民とともに学び創る健康生活」の一環である『住民による教育支援』を継続して実施しているものである。

○教育ボランティア登録状況

今年度の教育ボランティア登録者数は 73 名であり、男性が 38 名（52.1%）、女性が 35 名（47.9%）、年代は 30・40 代が各 1 名（各 1.4%）、50 代が 7 名（9.6%）、60 代が 19 名（26.0%）、70 代が 35 名（47.9%）、80 代が 10 名（13.7%）であった。

なお、昨年度の登録者数は 179 名であったが、全く活動をしていない方も多く含まれていた。そのため、今年度は教育ボランティア登録継続の有無について調査を行い、「継続する」と回答いただいた方のみを登録者とした。

○教育ボランティア導入授業の実際

今年度実施された教育ボランティア導入授業は、学部 13 科目、大学院博士前期課程 1 科目の計 14 科目であった。今年度実施された教育ボランティア導入授業の概要を表 1 に示す。なお、各科目の担当者からの報告はホームページ上に掲載している。

表 1 2019 年度に実施した教育ボランティア導入授業（学部）の概要

	実施日	科目名	担当教員	実施場所	対象学生	ボランティア 参加数
1	5 月 27 日 6 月 3 日	在宅看護論	宇多、片倉、丸尾、大瓦	北館 実習室	3 年生	延べ 12 名
2	5 月 29 日	健康学習論	山下、岩本、波田、藤本	北館 実習室	3 年生 (選択)	30 名
3	5 月 31 日	老年健康生活支援論	坪井	西館 講義室	2 年生	1 名
4	6 月 6 日	基礎看護学実習 I	石原、澁谷、柴田、玉田、 大澤、吉川、稲垣、児玉、 新澤	西館 講義室	1 年生	33 名
5	6 月 10 日 17 日	基礎看護技術演習Ⅲ	澁谷、大澤、吉川、児玉	北館 実習室	2 年生	16 名
6	6 月 28 日	慢性病看護学概論	池田	西館 講義室	2 年生	2 名
7	10 月 5 日 19 日	多職種連携 I	片倉、丸尾、大瓦	神戸学院 大学	1 年生	14 名
8	9 月 10 日 11 日	基礎看護学実習	石原、澁谷、柴田、玉田、 大澤、吉川、稲垣、児玉、 新澤	北館 実習室	2 年生	延べ 16 名
9	10 月 25 日	看護学原論 B	石原、澁谷	西館 講義室	1 年生	30 名
10	11 月 15 日	公衆衛生看護活動論	岩本、波田、藤本、山下	体育館	4 年生 (選択)	21 名
11	12 月 5 日	ヘルス プロモーション論	丸尾、加藤	西館 講義室	1 年生	16 名
12	1 月 15 日 22 日	フィジカル アセスメント	澁谷、大澤、吉川、児玉	北館 実習室	1 年生	14 名
13	2 月 10 日 ～21 日	健康生活支援学実習	健康生活支援学実習 担当教員 ※表Ⅱ-2 参照	西区 須磨区	2 年生	91 名

②健康生活支援学実習

教育ボランティア導入授業の 1 つである健康生活支援学実習は、「地域の人々の生活を理解し、健康な生活を支援する能力を育成する」ことを目的に平成 19 年度より実施しており、今年で 13 年目を迎える科目である。本実習は、西区および須磨区の民生児童委員協議会および地域住民の皆様にご協力いただき、地域に住む人々の生活や地域を知ることを通じて、人と関わる力を養い、その人にとっての「健康」とは何か、健康と地域のつながりや健康への支援の在り方を考えることを目標としている。2 年生の後期に実施し、実習期間は 2 週間、西区の 10 地区と須磨区（北須磨地区）の 2 地区の計 12 地区で行っている。実習では、学生が実習にご協力いただいた方のご自宅への訪問、その方が普段の生活の中で行っている様々な活動への同行、また、地域に学生が出向いて様々な施設や地域の集まりに参加しながら、地域で暮らす人々の生活や健康についての思い、地域についての学びを深めている。

2019 年度は 2020 年 2 月 10 日（月）～21 日（金）に実施した。実習の概要を表 2 に示す。

実習では、学生が 2～3 名 1 組となり、それぞれ教育ボランティアの方々のご自宅や活動拠点に訪問し、一緒に活動をさせていただいた。その中で学生は、教育ボランティアの方々に、生活や暮らしの様子、健康に気をつけていること、ご家族や地域への思いや健康に関する考え方等について伺った。また、地区探索で地域を歩き、地域の特徴を自分たちで考えたり、街頭インタビューをしながら教育ボランティアの方々と地域に住む人々の考え方に違いがあるのか等、自分たちが抱いた疑問を明らかな計画を立案し、積極的に行動していた。さらに、教育ボランティアの方々への訪問や地区探索後には、学生間で毎日意見交換を行い、互いに見たこと、聞いたこと、考えたことを共有することで、学びを深めていた。実習最終日に行った学内での学習成果発表会では、それぞれの学びの共有をして、自分たちが実習をした地区や学びについての共通点や相違点について理解を深めていた。

この実習を通して、学生は、健康観や価値観は個人によって様々であり、それらに至るまでに様々な背景があることについて理解することができた。同時に、教育ボランティアの方々から地域の課題を聞いたり、沢山の励ましを受け、これから自分たちが看護職としてどうあるべきか、その人に寄り添った支援とは何かを考え続けることが重要であることに気づくことができた。

表 2 2019 年度 健康生活支援学実習の概要

地区名		担当教員名	ボランティア参加 人数
西区	学園都市	荻野, 岩本	8 名
	伊川谷	新澤, 岩本	8 名
	井吹台	大澤, 波田	8 名
	長坂	長尾, 波田	8 名
	西神西	山下, 玉田	8 名
	桜が丘	細川, 玉田	8 名
	押部谷西	泉, 片倉	7 名
	押部谷東	藤本, 片倉	8 名
	平野	清水, 畑中	7 名
	神出	坂口, 畑中	7 名
須磨区	竜が台	野寄, 丸尾	7 名
	菅の台	吉川, 丸尾	8 名

③教育ボランティアニュースレター

教育ボランティアニュースレターは年に 1～2 回発行している。今年度は第 22 号となるニュースレターを 2020 年 1 月に発送した。内容は「教育ボランティア座談会」についてであった。詳細は、ホームページで公開している。

④教育ボランティア交流会

教育ボランティア導入授業の充実ならびに教育ボランティアの方々と教員、学生の交流を図ることを目的に、第 7 回の教育ボランティア交流会を企画した。日程は 2020 年 3 月 5 日（木）13：30～15：30 で、場所は西館講義室を予定した。事前申し込みでは、教育ボランティア 39 名、学生 9 名が参加予定であった。

しかしながら、政府より新型コロナウイルスの感染拡大防止のための指針が出されたことにより、2020 年度の交流会は延期することとなった。

⑤教育ボランティア座談会

教育ボランティア座談会については、総括編を参照。

⑥ 学生ボランティアの活動状況とその支援

○概要

学生の自主的活動として、以下のサークル活動がある。それ以外にも学生は自主的にボランティア活動を行っている。

なお、本学は、学生のボランティア活動を通じて、援助者としての自己の基盤作りをすることを目的に、「ボランティア活動」を科目として設定し、活動を支援している。なお、平成 29 年度の「ボランティア活動」の履修者数は 1 名であった。

○主なボランティア活動の活動状況とその支援

学生ボランティア活動に関しては、総合大学などでは学生のボランティアセンターが設けられ、情報共有や学生同士あるいは地域の団体と交流が図られている。本学でも学生のボランティア活動をサポートする機会を増やそうと、ボランティア交流会を開催した。交流会の目的は、1) 当事者である学生が互いの活動を知ることを通してボランティアの魅力や意義を再発見すること、2) 教職員が学生のボランティア活動の実際を知り、必要なサポートを共に考えることであった。活動内容の紹介方法として、ボランティア活動団体の顧問及び団体代表が今年度の活動内容、活動頻度、学生参加者数等について報告を行った（なお、「K-spring peer/ ピアカウンセリング（思春期ピアカウンセリング）」については、本報告書「思春期ピアカウンセリング」を参照）。

	団体名	顧問
1	アロマサークル	江川幸二
2	SCHOP（ス Copp）	池田清子
3	ボランティア部	池田清子
4	コーラルレイン	二木啓
5	K-spring peer/ピアカウンセリング	高田昌代
6	まほうのハッピー	*

* 学生の自主運営で行っている活動であるため、顧問は設置されていない

⑥－1 アロマサークル

○今年度の活動内容

5 月のあざみ祭で、同窓会「あざみ」のメンバーと一緒に、地域住民の方や教職員の方を対象にアロマのハンドマッサージとハーブティの提供を実施しました。事前に同窓会メンバーとともにアロママッサージマッサージの手順の確認と練習をして臨みました。地域の方や教職員の方とハンドマッサージを通して打ち解けてお話

をすることができ、終了後にハーブティを飲んでいただくことで相乗効果をもたら
し、癒しの時間を提供することができました。

○活動頻度

ボランティア活動は年 1 回程度で不定期

○学生参加者数

2-3 名程度（実習直前の時期でした）



⑥-2 SCHOP（ス Copp）

○今年度の活動内容

2018 年度に引き続き、活動は休止している。

⑥-3 ボランティア部

○今年度の活動内容

ボランティア部は平成 15 年から中央区の災害復興住宅で健康支援の活動を行なっている。学生は、体重・体脂肪・血圧測定と季節ごとのレクリエーション活動の企画と実施を担当し、顧問教員は健康講座と健康相談を担当している。参加者は後期高齢者が多いため、健康講座では介護予防に関連したテーマをとりあげ、体操やストレッチを行う時には学生が参加者の転倒や躓きを防止するため、見守りを行っていた。レクリエーション活動では、認知症を予防するためのクイズや漢字づくり、さらに集団で行う風船バレーなどを取り上げ、いずれも参加者に大好評であった。

一方で、学生の参加者が 4 名の開催月があったため、今後は開催回数や時期について検討する必要があると考える。

○活動頻度

定期的 第 1 土曜日（年 8 回）

○学生参加者数

活動 1 回につき 4～15 名/回 延べ 50 名



転倒予防カルタをしている様子（11月2日）

⑥-4 コーラルレイン

○今年度の活動内容

コーラルレインは主に年内に予定されているコンサートや学内式典への出演と、そのための練習を行っています。本サークルは「歌を歌うのも聞いていただくのも楽しく」というモットーの下、活動しております。

4月：入学式

新入生歓迎会

カレッジ音楽祭 in BRANCH

5月：あざみ祭でコンサート

8月：オープンキャンパス

12月：学内クリスマス会でのミニコンサート

2月：中央市民病院院内コンサート

3月：卒業式

卒業式後、卒業生へ向けてのミニコンサート

本年度の活動では、2～4年生の看護実習のため、全員がそろっての活動が困難でしたが、各学年がそれぞれに役割を果たし、コンサートを実施することができました。どのステージでも聞いてくださる方がいるありがたみを感じながら歌うことができました。今年度は新しく施設や式典のご依頼をいただき、歌の完成度やご依頼いただいたという責任感を感じながらの出演でした。

○活動頻度

- ・ 定期

毎週月曜～金曜日の昼休みのうち週四日

- ・ 不定期

年 1 回：①入学式、②卒業式、③あざみ祭、④中央市民病院の院内コンサート、
⑤オープンキャンパス、⑥学園都市音楽祭、⑦なごやか垂水ミニコンサート、
⑧カレッジ音楽祭 in BRANCH 等

○学生参加者数

定期練習：3～15 人

⑥-5 思春期ピアカウンセリング（学内活動と学外活動の同時活動）

○今年度の活動内容

思春期ピアカウンセリングは、思春期にあるピアカウンセラー(大学生や専門学校生など)が同世代の人々を対象として生と性に関する健康教育を行う教育方法の 1 つである。世界のさまざまな国においてもこの手法が有効であることが実証され、日本においても厚労省の健やか親子 21 に取り入れられるなど思春期保健活動の中にとり入れられている。現在では、全国各地で思春期ピアカウンセラーの養成、思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーションが行われている。

兵庫県では、平成 16 年度よりひょうご思春期ピアカウンセリング研究会が思春期ピアカウンセラーを養成し、兵庫県内で活動を行っている。兵庫県の思春期ピアカウンセリング活動は、本学の学生が中心となり、積極的に取り組んでいる。現在のこの活動は大きく分けて 4 つある。1 つは、**中学校、高校の集団を対象に、神戸市内はもとより兵庫県下の中学校、高校に生と生殖の自己決定の支援のための健康教育を実施している**。各学校から依頼があれば「自分の宝物」「わたしとわたしとあなた」などのテーマで、友人関係・恋愛関係でのピアプレッシャーや性感染症(STI)や妊娠、デート DV など、自分を大切にするための生と性の自己決定の内容を取り入れている。2 つめは、**個別のカウンセリング**である。須磨区名谷駅近くのユースプラザや中・高校において、中高生や大学生の個別や小集団でのピアカウンセリングであるピアルームを開催している。3 つ目は、社会へ HIV やデート DV の啓発活動の実施である。4 つめは、ピアカウンセラーの後輩育成と全国のピアカウンセラーとの情報交換・交流である。

○今年度の活動頻度と学生参加者数

・中学校、高校への思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション

No.	実施日	曜日	学校名	時間	対象	参加人数	ピアっ子数
1	8月20日	Tue	宝塚高校		打合せ		2人
2	9月6日	Fri	宝塚高校	13:30~14:20	看護専攻生2年生	14人	6人
3	9月20日	Fri	宝塚高校	13:30~14:20	看護専攻生2年生	14人	6人
4	3月9日	Mon	宝塚高校	感染拡大防止のため中止		人	人
5	11月26日	Tue	宝塚東高校	12:30~13:30	打合せ		1人
6	12月11日	Wed	宝塚東高校	13:00~14:30	保健委員	29人	5人
7	3月2日	Mon	宝塚北高校	感染拡大防止のため中止			
8	3月10日	Tue	宝塚北高校	感染拡大防止のため中止			
9	8月26日	Wed	三田祥雲館高校		打合せ		3人
10	9月2日	Mon	三田翔雲館高校	15:45~17:15	保健委員・希望者	40人	7人
11	2月7日	Fri	三田翔雲館高校	15:45~17:15	保健委員・希望者	40人	6人
12	1月22日	Wed	神戸松蔭中学校	13:25~15:15	2年生	90人	10人
13	9月4日	Wed	須磨翔風高校	13:10~14:50	1年生	160人	14人
14	9月25日	Wed	須磨翔風高校	13:10~14:50	1年生	120人	11人
15	4月18日	Thu	市看ランチピア	12:00~13:00	希望者	6人	4人
16	5月25日	Sat	神戸市看護大学	10:00~16:00	希望者	10人	6人
17	12月6日	Fri	神戸市看護大学 映画会)		希望者	10人	6人
18	12月13日	Fri	神戸市看護大学 映画会)		希望者	10人	6人
19	12月20日	Fri	神戸市看護大学 映画会)		希望者	10人	6人
			合計			553人	99人

・平成30年度ピアサポートルーム（名谷）

No.	実施日	曜日	学校名	時間	対象	参加人数	ピアっ子数
1	6月20日	Thu	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	20人	4人
2	7月4日	Thu	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	25人	4人
3	8月19日	Mon	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	30人	4人
4	9月4日	Wed	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	20人	10人
5	9月25日	Wed	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	15人	6人
6	10月30日	Wed	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	4人	2人
7	11月13日	Wed	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	15人	3人
8	12月11日	Wed	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	15人	2人
9	1月16日	Thu	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	5人	4人
10	2月6日	Thu	ピアサポートルーム(名谷)	18:00~20:00	希望者	30人	1人
			合計			179人	40人

・第4回ジャパン・ユース・フォーラムへの参加

平成30年11月2日、3日に、日本家族計画協会、日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会の主催で、第4回ジャパン・ユース・フォーラム国立東京オリンピック記念青少年総合センターで開催された。兵庫県における活動報告を行った。今回、全国から代表する若者が集まり、本学の思春期ピアカウンセラー3名が参加した。思春期から青年期にかけら若者たちが直面する問題を、若者たち自身が検討し、政策提言「若者宣言」を作成・発表した。

・DV防止啓発、HIV感染防止啓発活動

神戸市と共同で、DV防止啓発、HIV感染防止啓発活動を行った。

実施日	曜日	学校名	時間	対象	参加人数	ピアっ子数
11月3日	Tue	パープルリボンキャンペーン	11:00~15:00	来場者	500人	12人
12月1日	Sun	エイズデーキャンペーン	16:00~17:00	来場者	1,200人	25人
11月2日	Sat	ジャパンユースフォーラム			0人	3人
11月3日	Sun	ジャパンユースフォーラム			0人	3人
9月14日	Sat	全国ピア参加			0人	27人
9月15日	Sun	全国ピア参加			0人	27人
10月14日	Mon	思春期保健関係者研修会	13:45~16:00		45人	8人
6月15日	Sat	思春期ピアカウンセラー養成講座			33人	8人
6月16日	Sun	思春期ピアカウンセラー養成講座			33人	10人
6月22日	Sat	思春期ピアカウンセラー養成講座			33人	9人
6月23日	Sun	思春期ピアカウンセラー養成講座			33人	11人
2月15日	Sat	思春期ピアカウンセラー養成講座			28人	5人
2月16日	Sun	思春期ピアカウンセラー養成講座			28人	4人
		合計			1,933人	152人

○成果

・中学校、高校への思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション

参加者からは、毎回アンケートで評価を行っており、身近な大学生でよかった、分かりやすかった、自分を大事にしようと思った、同じクラスでも他の人の意見を聞いて良かった、などの意見がたくさん寄せられた。今年度の実施校はこれまで実施してきた学校であったため、校長はじめ教諭からの理解と信頼があり、それに今年度も十分こたえれたと思われた。思春期ピアカウンセラーとしては、毎年行われている養成講座でブラッシュアップをしたり、デートDVやSNSの問題に関する講習会を聴いて知識を増やしたりと、自己研鑽を積んでいる。

・ピアサポートルーム

名谷は継続して行っていることもあり、須磨翔風高校の高校生が多く寄って話して

いる。思春期ピアカウンセリングを行った中学校や高校で、思春期ピアカウンセリング修了後行かう時には、進学のことや部活のことなどを話にくる生徒が多くみられる。各中学校や高校におけるピアルームも、開催学校の教諭の取り計らいにより、年々多くの学生が集まって、悩みともおしゃべりとも言えない会話をピアっ子と行うことで、顔つきが明るくなり、自己決定に繋がっていると思われる。

・全国のピアっ子との情報交換・交流

2019 年度は、群馬で全国の思春期ピアカウンセラーが参加し、ひょうごピアっ子も 27 人参加した。全国の活動状況や若者の役割を夜を徹して話し合い、自分たちの活動が広がるとともに、振り返るいい機会になった。



⑥-6 まほうのハッピー（学外活動）

○今年度の活動内容

月に1回第3土曜日に大学生が企画した、普段子どもたちだけでは出来ないような身体を使った遊びや、工作などに子どもたちを呼び、大学生と子どもが一緒になって楽しく遊んでいます。

まほうのハッピーの由来が、

「まほうの」…いろいろ作り出すこと

「ハッ」…はっ！とひらめく

「ぱー」…手のひらのぱーで表現する

というものであるなので、子どもたちに楽しんでもらいたい、何か新しいことに挑戦したり、何か得られるものがあってほしいという思いで活動しています。

5月:足ペタ(公園に大きな模造紙を広げて手や足に絵の具をつけてペタペタする)

5月:段ボールで巨大パズル作り

6月:ミニ運動会

7月:お化け屋敷

8月:夏フェス(児童館恒例行事)

10月:ハロウィンに関する工作や遊びを行う

11月:外遊び

12月:クリスマスパーティ(様々なゲームで遊ぶ、フェルトでツリー作り)

1月:お正月遊び(凧揚げやカルタなど昔ながらの正月遊び)

2月:外遊び

○活動頻度

イベントは月1回第3土曜日に行っています。イベント準備のために毎週1回約2時間会議を行っています。

○学生参加者数

神戸市看護大学 10 名、神戸芸術工科大学 6 名、流通科学大学 7 名、その他 1 名



A decorative graphic on the right side of the page. It features two concentric blue circles, one smaller and one larger, both with a lighter blue outer ring. Two thin blue lines intersect at a point between the circles, forming a V-shape. The lines extend from the top left and bottom right towards the intersection point.

III. 国際交流活動

国際交流活動の概要

国際交流委員会は、学生および教員、地域の看護・医療・福祉専門職の国際的教育・研究の機会に関する事項を担当している。

2019 年度の活動としては、例年実施している海外看護学研修において、新型コロナウイルス感染の拡大による影響で、実施不可能となった。また、単発での海外からの訪問・研修等の活動も無かった。

活動実績

①英語ネイティブ教員の着任と English Lunch Time

2019 年 9 月より英語を母語とする教員（准教授）1 名が着任した。同教員を中心として 10 月より毎週木曜日 12 時 20 分から 13 時まで English Lunch Time を開催した。これは、昼食の時間を活用して英会話を楽しみつつ、会話を通して外国文化や、国境を超えた視点や考え方などに触れる企画である。教職員の参加者が多いが、大学院生や学部生の参加者、さらに本学を訪問した高校生の参加もあった。参加者数は回によって 2 名から 10 名程度と様々であるが、参加者ゼロの回は無かった。English Lunch Time の実施により、参加者が英会話を通して外国文化や国境を超えた視点、考え方に触れ、国際性について考える機会を持てるようになった。

②留学生の受け入れに関する近隣 2 大学への聴き取り調査

留学生の受け入れに関し、現在実施中の近隣 2 大学（神戸市外国語大学・兵庫県立大学）を訪れ、国際交流担当事務担当者らとそれぞれ聞き取りや意見交換を行なった。このうち、神戸市外国語大学における留学生数は学部生 4 人、大学院生（日本語専攻）20 人、および別科の日本語プログラムに半期で 20～30 人が在籍していること、日本語での教育が前提であることから学生のリクルートは主として国内の日本語学校や留学生フェアであること、ウェブ面接を導入すべく現在交渉中であること等の情報を得た。兵庫県立大学における留学生は学部生 42 人、大学院生 124 人、科目等履修生 18 人が在籍していること、うち看護学部（明石キャンパス）では博士後期課程に 4 人であること、学生リクルートは国内外の留学生フェアと大学間協定提携校への呼びかけであること、および入学試験でウェブ会議用アプリ（ZOOM）を導入済みであること等の情報を得た。次年度は、看護系大学・学部に対象校を絞って、より広範かつ詳細な情報を収集するとともに、大学間協定提携校の増加の可能性に関して検討する予定である。

③米国ワシントン大学での在外研究

海外の提携大学とは、海外看護研修の在外研究の機会を通じて、学術交流を維持発展させるための活動を実施してきているところである。2019 年度の在外研究は、

大学間協定を締結している University of Washington 看護学部で受け入れをしていただいた。在外研究中には、共同研究の実施には至らなかったが、同分野の研究者らから助言を得て Patient Report System のシステムデザインをした。今後、日本での調査終了後に、当システムを共同利用できるように翻訳する予定である。

2019 年度 地域連携教育・研究センター 組織

センター長 石原 逸子

	氏名	所属	
委員長	石原 逸子	基盤看護学領域	基礎看護学分野
	藤永 竜太郎	専門基礎科学領域	医科学分野
	丹野 恵一	専門基礎科学領域	健康科学分野
	吉川 あゆみ	基盤看護学領域	基礎看護学分野
	波田 弥生	健康生活看護学領域	公衆衛生学分野
	服鳥 景子	健康生活看護学領域	老年看護学分野
	沼田 富久美	健康生活看護学領域	ウィメンズヘルス看護学分野
	石田 絵美子	健康生活看護学領域	精神看護学分野
	岡永 真由美	療養生活看護学領域	小児看護学分野
	丸尾 智実	健康生活看護学領域	在宅看護学分野
	大瓦 直子	療養生活看護学領域	在宅看護学分野

※なお、「第Ⅲ章 国際交流活動」については、以下の委員会の活動である。

国際交流委員会

	氏名	所属	
委員長	加藤 憲司	専門基礎科学領域	健康科学分野
	山内 理恵	人間科学領域	言語科学分野
	稲垣 聡	基盤看護学領域	基礎看護学分野
	嶋澤 恭子	健康生活看護学領域	ウィメンズヘルス看護学分野
	高山 良子	療養生活看護学領域	慢性病看護学分野
	桑原 京子	療養生活看護学領域	慢性病看護学分野
	片倉 直子	療養生活看護学領域	在宅看護学分野

神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター
2019 年度 実績報告書

編集日 2020 年 3 月 31 日

発行日 2020 年 6 月 1 日

発行者 神戸市看護大学

〒 651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

TEL 078-794-8080 FAX 078-794-8086